

モノグラフ  
中学生の世界  
vol. 21

# 性役割をめぐる



## 目次

特集 ● 女子中学生の家庭志向をめぐる	深谷昌志	2
調査レポート ● 性役割をめぐる	深谷昌志 佐々木智子 畠山 滋 庄 健二	6
本報告書の概要		6
第I章 異性への関心		8
1. 異性の目を意識した経験		8
2. 親しくなりたい異性像		13
3. 男女交際の子備軍		18
第II章 交際中の中学生		20
1. 男女交際の現実		20
2. 男女交際の意識		25
第III章 両親の態度の影響		31
1. 異性との交際に対する両親の態度		31
2. 家庭での性教育		33
第IV章 性役割に関する意識		39
1. 結婚してからの暮らし方		39
2. 男らしさ、女らしさのイメージ		45
まとめに代えて		50
資料1 調査票見本		52
資料2 学年・性別集計表		66

た。

特集



女子中学生の家庭志向をめぐって

放送大学教授 深谷 昌志



性差についてのたてまえと本音

この原稿は、昭和60年の6月に執筆している。そして、このところ、性をめぐって、3つのニュースが伝えられてきた。

第一は、名門のゴルフ場が、著名な女性次官のプレイを、休日は女性禁制というたてまえから閉め出したできごとである。国会でも問題となり、首相は趣味の領域だから干渉で

きないと体をかわしたが、今どきめずらしいくらい、女性の存在を無視した行為だと評判になった。

たしかに、マラソンはいうまでもなく、レスリングやサッカー、ボクシングなど、スポーツ面での女性の進出は著しい。それと同時に、職業生活の面でも、数は少ないながら、女子禁制といわれる場へ進出している女性も目につく。そうした状況だけに、ゴルフ場で

の  
な  
た  
に  
ち  
と  
の  
人  
と  
面  
害  
て  
な  
た  
と  
目  
差

夕  
暮  
一  
日  
の  
ま  
よ  
い  
し  
る

のこととはいえ、女子禁制の話に、まだそんなところが残っていたのかという印象を抱いた人が多かろう。

そうした中で、国会では、男女の差別撤廃についての法案が通過した。欧米などでは、チェアマン、ポストマン、スチュワーデスなどという言葉が、職業に性差がまつわりつくのでつかわれなくなり、チェアパーソンなどの中性的な単語が出現している。まして、求人などにあたって、「35歳以上の高卒男子」と書こうものなら、性、学歴、年齢の3つの面からの差別問題がおこってくる。

そうはいっても、職場の中に、ある程度の割合で、年齢や性別に関連することも多いので、欧米では「力強さが必要」、「デリケートな神経の持ち主」といった形で、言葉の置きかえが行われている。それだけに、とくにアメリカの場合、たてまえが語られすぎ、現実とのギャップが目につく。しかし、そうした理念をかかげるあたりに、社会の若々しさを感じる気持ちがある。

日本の場合、男性と女性という性的な役割分化が欧米と比べ固定されているかどうかは疑問で、役割分化が崩れている面と固定されている面との両者が認められる。しかも、今回のゴルフ場のような事例はまれで、一般的にはなしくずしに事態を改善するスタイルが定着している。その結果、いつとはなしに、思わぬほど状況が進展する場合がある。性差についても、部分的に性差の解消のすすんでいる面があり、それが性差の撤廃へのとりくみをむずかしくしているような印象を受ける。

そうした一方、この数日、テレビは、松田聖子の結婚でもちきりの感じである。山口百恵のときもそうであったが、今回は休業するだけで、いずれ秋にも歌手として復帰するという。しかも、ほんの何か月前に、恋人を取りかえての結婚で、なんとなく素直に喜べない気がするが、いずれにせよ、女性のしあわせは結婚にあるという雰囲気でのニュースが多い。まして、新婚旅行先のハワイまで、レポーターがついていくのを見ると、なんとも平和な世の中だと思うと同時に、テレビが人間性をそこねるのではという感じがする。

そうした感慨はともあれ、こうしたテレビを見ている女子中学生たちは、どんな感じを抱くのか。自分なら、こんな式をあげたい、こんな生活を送りたいと、結婚への夢がふくらむのであろう。そして、そうした結婚へのあこがれは、女性の家庭志向を無意識のうちに強めていく可能性が多い。さらにいえば、性差撤廃の法律よりもテレビの結婚式のニュースのほうが感情に訴えるので影響するものが強かろう。

そう考えると、この十日にかぎっても、たてまえの上で性差の解消が説かれつつ、現実には、性差の固定化へとすすんでいるような気がする。それだけ、性差の問題はたてまえの論議でかたづけにくいむずかしい面を含んでいるのであろう。

## 良き妻・賢い母への道

たしかに、今回のレポートに限らず、女子中学生の反応をみると、結婚に強いあこがれ

の気持ちを抱いている場合が多い。しかも、そうした結婚願望の割合は、近年になればなるほど、増加の傾向をたどっている。

男女の差別撤廃法のゆくえはともあれ、実際問題として、女性であることが進路をさまざまな事例はきわめて少なくなった。大学進学はむろんのこと、社会生活を送るにあたって、男女の壁は取り除かれつつある。もちろん、現在だけをとらえると、そうはいつでも就職などにあたって、女子学生への風当たりがきついのは事実であろう。しかし、過去から現在という時の流れの中で問題をみつめるなら、一昔前と比べ、性差のもつ重みは少なくなった。それにもかかわらず、どうして女の子たちは、良き妻・賢い母への道にあこがれの感情をもつのか理解しにくい。

松田聖子の結婚ブームを見ていると、山口百恵の生き方からの残像を感じる。あれだけのスターが、おしげもなく歌手を引退して、主婦に専念する。そして、子どもを産み育てている。ときおり、テレビに登場する姿にも、いかにもしあわせな母親という感じで好意をもてる。

そうした生き方に、生徒たちは家庭のしあわせがスターの座より大事という教訓を学ぶ。そういえば、バレーボールの選手も、結婚適齢期になると第一線から退くし、つい最近、マラソンの女子選手が結婚を契機に引退する事例もあった。

したがって、スターやオリンピック選手になれないまでも、家庭を守ることならできると、女子生徒たちが思い、家庭志向を強める

のは、むしろ当然の心の動きなのかもしれない。

さらにいえば、女子生徒たちは、自分の家庭で、しあわせな生活を送っている母の姿を見て育っている。そして、母親たちが家庭を守ることの大事さを娘に説く機会も多からう。娘からしても、母親のような生活を送るなら、家庭中心の生き方をしてもよいと思いはじめる。

こう考えてくると、マスメディアに登場する女性の生き方から、身近な母の姿まで、女子中学生を家庭志向へと駆り立てているものが多いのに気づく。しかも、あらためて、女性が良き妻・賢い母への道を大事にするのが望ましくないのかと問われれば、少なとも間違っていないといわざるをえない。つまり、社会的に、女性だからという理由で、良き妻への道を強制するのは望ましくない。また、良き妻だけが女性の唯一の道というのは妥当でない。しかし、女子中学生たちが、社会参加の道をふまえつつ、自分たちの意志で良き妻・賢い母の人生を歩もうとすることを批判することはできない。

その結果として、家庭へのあこがれの気持ちは歯止めを失った感じで、女子中学生の心をとらえていく。しかも、男子たちも女子の家庭志向を歓迎することはあっても、反対する必然性はないので、むしろ、助長する態度にでる。というより、多くの男子生徒は自ら自身、社会的な達成を断念して、せめてしあわせな家庭を築きたいと考えている。したがって、女子生徒が、家庭へあこがれの気持ち

しな  
つ家  
を  
を  
う。  
な  
は  
す  
女  
の  
女  
が  
も  
ま  
良  
ま  
は  
社  
で  
批  
持  
心  
の  
す  
度  
ら  
あ  
が  
ち

を抱くのは、パートナーの誕生を意味しており、もろ手をあげて賛成したいところなのであろう。

### 内からの形での分業化

こう考えてくると、冒頭で紹介した3つの事例と同じように、理念としての性差の解消がすすむ一方で、現実問題として良き妻・賢い母を女性の生き方とする感覚が育ち、性差の固定化が強まる。もちろん、中学生たちのつくであろう家庭は、これまでと異なり、男性の家事参加も多くなるであろうし、妻だからといって、家庭に束縛されることにはなるまい。しかし、男性と女性とが築く家庭の中では、女性が出産し、育児の主たる担当者となるので、男性は外へ出て、収入をあげる生活を送る。その結果、新婚のころはともあれ、生活を重ねるにつれて、女性は家庭を守り、男性は社会へ出るといった性差に対応した役割の分化が生まれる。

もちろん、現在ではそうした役割分化を、かつてのように理念として社会的に押しつけることは少ない。しかし、生徒たちが自分の意志で、性的な文化を受け入れている。つまり、かつての性的な分業が、社会的に制度化されたものとするなら、現代は、内からの形で、分業が固定化しているといえよう。

こうした傾向に対し、学校などでは女子中学生たちの自立を求める気運も見うけられるが、すでにふれた通り、社会的にみると、女子中学生の家庭志向は大きな流れとして支持されているので、女子中学生たちは、家庭生

活という安住した場への志向を強めていく。

考えてみれば、女子中学生たちは、これが自分といえるようなたしかかなものを、持ちえないでいる。勉強はそれほど得意でないし、スポーツもうまいといえない。それに、スタイルもそれほどよくない。つまり、自分らしさ、あるいは、アイデンティティを見いだせないでいる。

それだけに、相手にやさしく接し、こまごまとした世話をやくことくらいは、自分にならなくてできるだろうと思う。そうした意味で、女子中学生の家庭志向は、自分らしさを見いだせないでいる姿の裏がえしといっても過言であるまい。さらにいうなら、自分らしさをつかめないでいる生徒たちが、最後のよりどころにするのが、家庭志向だといえなくもない。

換言するなら、女子中学生たちが現在の自分に自信をもっているなら、とりあえず、自分の可能性を社会の中でたしかめようとする方向を志向しよう。ピアニスト、あるいは、医師、そして、教師、薬剤師などが、その一例であろう。そして、そうした自己実現に加えて、家庭との両立を図るのなら、中学生たちの心情は理解できる。すべてを投げうって、家庭志向へというのは、中学生としてはあまりに早く自分について、見きわめつけすぎているのではないか。ボーイズでなく、ガールズ・ビー・アンビシャスの言葉を送りたいと思う。

# 調査レポート 性役割をめぐって

放送大学教授  
深谷昌志

お茶の水女子大学大学院生  
佐々木智子

千葉県立上総高校教諭  
畠山 滋

筑波大学大学院研究生  
庄 健二

## 本報告書の概要

### ① 異性の目を意識した経験

異性の目を意識したことの少ない生徒たちではあるが、学年の上昇とともに、異性の目を意識するようになっていく(P.9図1、P.10図2、P.11図3、P.12図4)。

### ② 親しくなりたい異性像

男女ともに「ツッパリ」や「優等生」タイプの異性よりも、「やさしい」異性を求めている。なお、同性に対しても「やさしさ」を求める傾向がある(P.14図5、P.15図6、P.16図7)。

### ③ 男女交際の子備軍

男子で好きな女の子のいる割合は45%、女子では68%にのぼる。学年別にみるならば、男子は1年32%から3年67%へと倍増するのに対して、女子は1年から3年までほぼ一定している。ところが「両思い」の生徒たちは3割強にしかすぎない(P.18図9、P.19表1)。

### ④ 男女交際の現実

つきあっている異性のいる割合は、男子で22%、女子で25%である。つきあっている異性のいない生徒でも異性の友だちは欲しいと



思い、中学生たちは異性を意識したことがないのに、異性の友だちを欲しがっている。6か月以上の交際期間のカップルが76%にもほり、相手はほとんど同級生で、行動レベルではまったく健全な交際だといってよいであろう (P.21図10、P.22図11、P.23図12、P.24図13、P.25表2)。

⑤ 男女交際の意識

異性との交際で、手をにぎったり腕を組んだりすることに対する態度が、交際のボーダーラインとなっている。しかしながら、学年の上昇につれて、交際の許容度が高まってくる (P.26図14、P.27表3)。

⑥ 男女交際にとまどう親たち

両親は男女交際に対してとくに規制は加えないだろうが、あまりいい顔もしないだろう

と生徒たちは考えている (P.32図18)。

⑦ 性の話はしたがらない父親

恋愛や性に関する話を両親はあまりしたがらないが、母親については、娘に対して、比較的話し合おうとする姿勢が見られる (P.34図19、P.35図20)。

⑧ 固定的な性役割観

中学生たちは結婚後の性役割を非常に固定的にとらえており、家事は女のものとする考え方が顕著であった (P.40図21、P.43図24)。

⑨ 男らしさ、女らしさ

「男らしさ」「女らしさ」についての感覚も、伝統的な価値観に対するこだわりがあり、現実の行動面とは、かなりくいちがいをを見せていた (P.46図26、P.47図27、P.48図28、P.49図29)。

女  
よ、  
るの  
一定  
は3  
)。

子で  
る異  
いと

サンプル数 (人)

学年 性別	1 年	2 年	3 年	計
男子	239	646	123	1,008
女子	211	667	193	1,071
計	450	1,313	316	2,079

調査概要

対象 ● 宮城県、栃木県、東京都、  
神奈川県、愛知県の  
中学1、2、3年生2,079名  
期間 ● 昭和60年3月  
方法 ● 学校通しによる質問紙調査



# 第 I 章 異性への関心



中学生ともなると、異性のことが気になりはじめ、「ませた子」になると男女交際を始めるようになる。そうした男女交際にいたるプロセスを考えてみるならば、異性への関心が高まり、異性といっしょにいたくなったり、

親しくなりたくなる。そして特定の好きな相手ができ、交際にふみきるといった順序が考えられる。

本章では、こうした順序をふまえつつ、中学生の性に関する意識をさぐっていきたい。

## 1. 異性の目を意識した経験

私立の男子校や女子校を除くと、公立学校での男女共学が定着しているのので、生徒たちは身近な異性にこと欠くことはない。そうした中で、中学生は異性への関心をどういう形で示しているのであろうか。

図1は、「異性の目を意識したことがあるか」どうかを①「勉強、スポーツ、部活動などではりきる」、②「服装やヘアスタイルに気

をくばる」、③「異性と話すときに思っていることがうまく言えない」、④「異性のことが気になって勉強がうまくはかどらない」の4つの点でたずねた結果である。

図によれば、「よくある」のは最高でも③「異性と話すときに思っていることがうまく言えない」の13%で、次いで、②「服装やヘアスタイルに気をくばる」12%、①「勉強、スポ

一、そし  
ま、く  
め、  
「こ  
ス、  
性、  
ない  
」ど  
い、  
ま、  
て、  
は、  
る、  
目、  
も、  
つ、  
つ、  
る、  
だ、  
り

つ

(E

(

①

②

③

④



ーツ、部活動などではりきる」6%となる。そして④「異性のことが気になって勉強がうまくはかどらない」にいたっては3%ときわめて少ない。「よくある」「ときどきある」「1、2度ある」を合わせても、①「勉強、スポーツ、部活動などではりきる」から③「異性と話すときに思っていることがうまく言えない」がころうじて5割を超える程度で、④「異性のことが気になって勉強がうまくはかどらない」にいたっては3割弱にとどまっている。

現在の中学生は、きわめて「すすんで」いて、異性に敏感なように感じられるが、実際は、異性をそれほど意識しないというのであるから、ことさら、異性というより、さめた目で異性と接しているように思える。もっともこれはうわべだけの現象で、心の底はちがっているのかもしれない。

ただし、このさめた感じも、学年の上昇につれてゆらいでくるのではないかと考えられるので、「ぜんぜんない」の数値のみをとりだし、学年別、性別にならべると、図2の通りとなる。

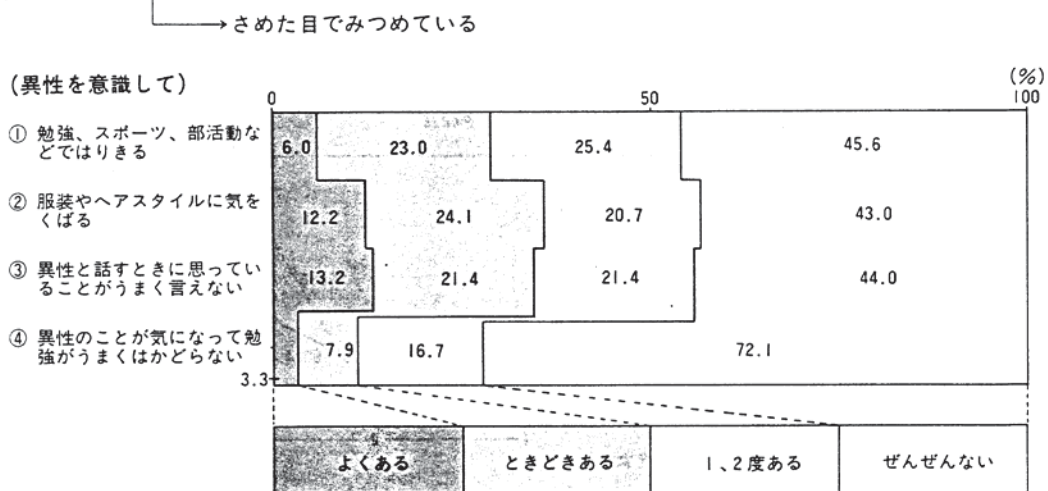
実線の男子は、中学1年から3年になるにつれて、幼さからぬけだし、異性への関心を

高めていくのに対して、点線の女子は必ずしも学年の上昇にしたがって数値が減少するのではなく、中学1年と2年との間に変化する傾向がみられる。すなわち、1年と2年の間で減少するが、2年と3年の間ではほとんど差がなくなってしまふ。女の子は、中学3年生にもなると、まわりの男の子が幼く見えるのか、それとも自然の形で異性と接するようになったのか、いずれにせよ興味深い結果である。

角度を変えて異性に対する関心をさぐって見たのが図3である。

この図は、さまざまな場面において、男女同席、つまり男女いっしょがよいか、男女別々がよいかをたずねたものである。①「クラスを班に分ける」のがもっとも多く、「ぜったい・どちらかといえば男女混合がよい」が40%で、賛成のもっとも多いこの項目ですら5割を下回っている。以下、②「教室の座席を決める」24%、③「休日、グループで遊びに行く」20%、④「友だちの家に集まって試験勉強をする」12%、⑤「放課後に友だちと校庭で遊ぶ」10%で⑥「遠足のバスの座席を決める」にいたっては9%となる。そして、男女混合はいや、どちらかといえば、男女別々が

(図1) 異性の目を意識した経験



よいと答えている者が6割を超える。同性だけだとのんびりできるが、異性が入ると、おちつけないというのであろうか。

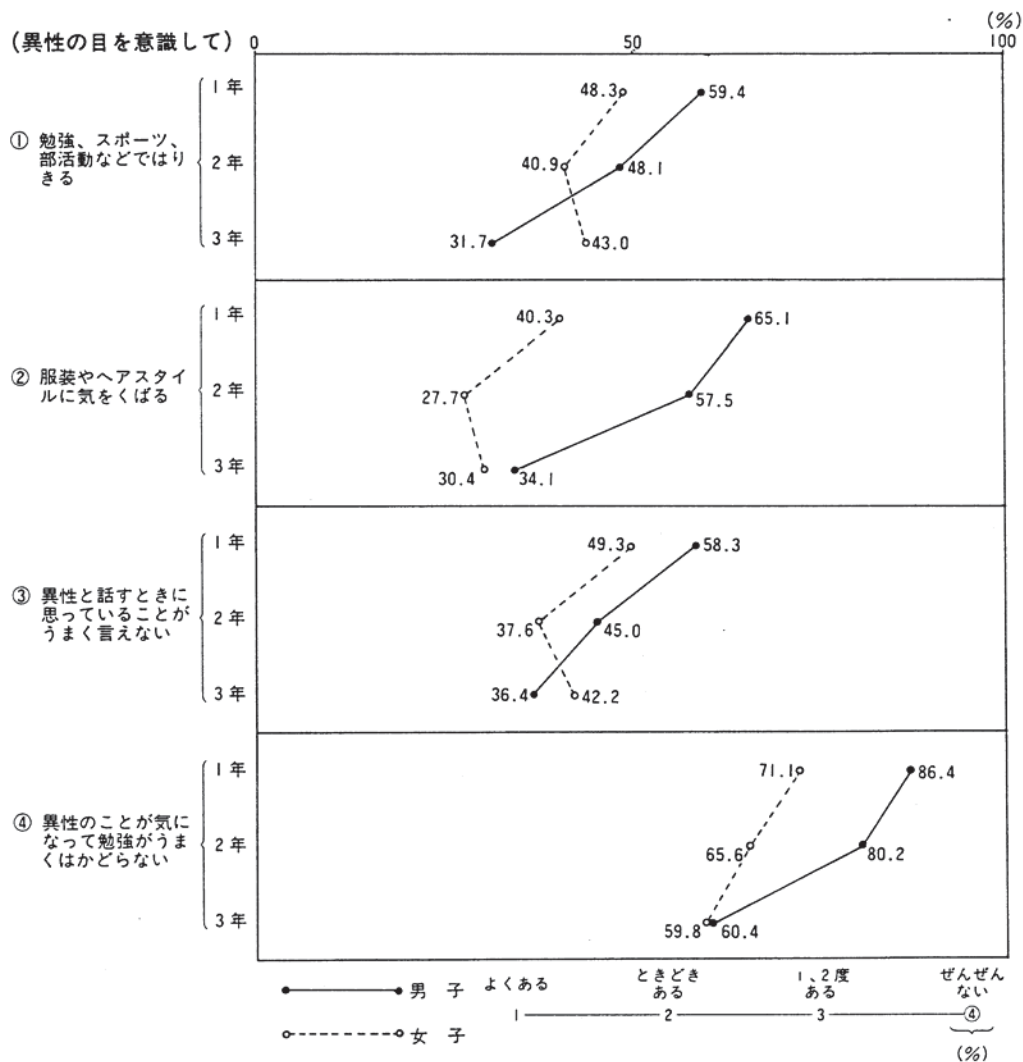
しかし、そうした異性観は異性を反発する年ごろまでの話で、男女混合にあまり積極的ではない生徒たちも、学年の上昇につれて男女混合がよいと言いはじめるのではないか。そこで、男女混合がよいか、男女別々がよい

かについて、学年別、性別の数値をあげると図4の通りとなる。

この図は、「ぜったい・どちらかといえば男女混合がよい」を左側に、「ぜったい・どちらかといえば男女別々がよい」を右側に配置し、実線が男子、点線が女子それぞれの数値を1年から3年の順にならべてある。

①「クラスを班に分ける」から⑥「遠足の

(図2) 異性の目を意識した経験×学年・性別



と  
ば  
ど  
配  
数  
の

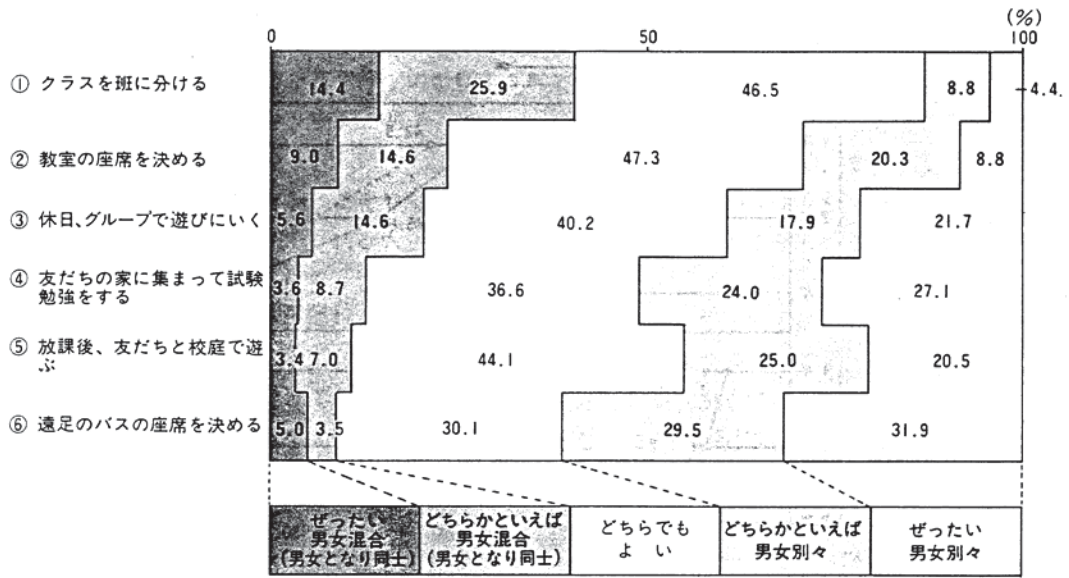
バスの座席を決める」にいたるまで、左側の男女混合がよいとする数値は学年の上昇とともに大きくなり、逆に、右側の男女別々がよいとする数値は、学年の上昇とともに低下している。

以上のように、異性の目をあまり意識せずには反発をする生徒たちも、学年の上昇につれて異性という存在を意識するように

なる。そこで、さらに一步すすんで、生徒たちが異性と親しくなりたいと思いはじめているのかどうか、異性にもてる子とはどんな子か、さらに、そろそろ性についての悩みがでてくる年齢だと考えられるので、それらのことについて、つぎにふれることにしたい。

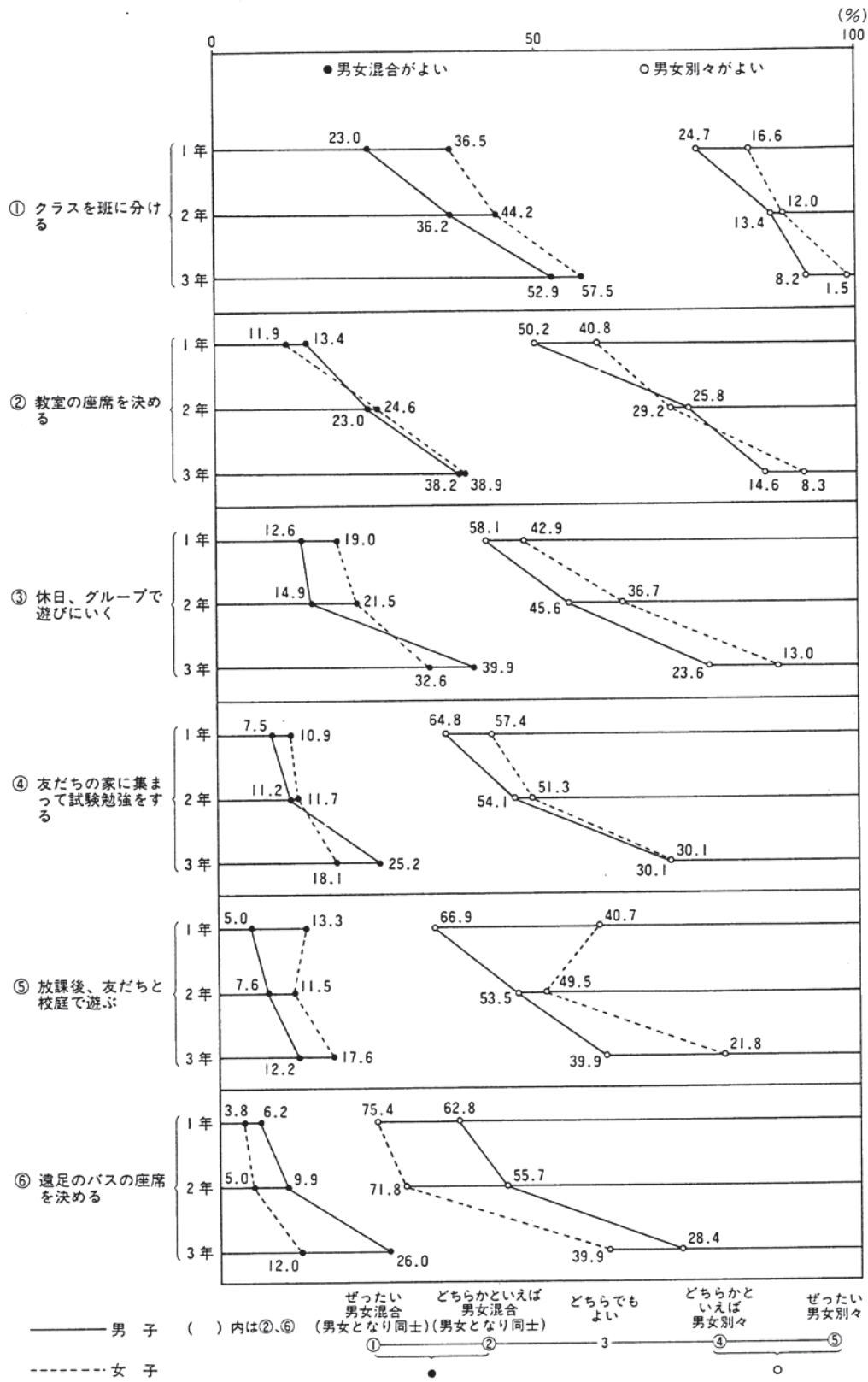
(図3) 男女いっしょがよいか

→ 混合はあまり好きでない



( )内は②、⑥

(図4) 男女いっしょがよいか×学年・性別



異性  
と  
か  
し  
た  
ん  
い  
と  
か  
だ  
E  
を  
た  
い  
を  
け  
線  
る  
よ  
の  
よ  
と  
織  
等  
の  
ツ  
好  
に  
さ  
さ  
う  
項  
こ  
く  
ら  
て

## 2. 親しくなりたい異性像

異性への関心は、異性一般でなく、特定の異性と親しくなりたいとか、異性にもてたいとかの願望につながっていくと考えられる。しかし、特定の異性といっても、さまざまなタイプが考えられる。そこで、親しくなりたいと思っている異性はどのようなタイプなのかを紹介することにしよう。

図5は、異性のタイプとして①「やさしさをもっている人」から、⑩「ちょっとツッパッタ人」までの16項目について、親しくなりたいと「とても思う」と「かなり思う」の数値を加えた結果である。なお、実線が男子、点線は女子の数値を示している。

男女とも上位に、①「やさしさをもっている人」、②「よく相談にのってくれる人」など、よく言われるような「やさしさ」や「親しみ」の項目がならんでいる。それに対して、⑩「ちょっとツッパッタ人」や⑬「目立つ感じの人」といった「不良っぽい人」だけではなく、⑩「成績のよい人」や⑬「まじめな人」といった「優等生」的タイプの人も、残念ながらそれほどの人気を集めていない。女の子が⑦「スポーツが得意な人」と、いわゆるスポーツマンを好むのはわかるとしても、男女ともお互いに「やさしさ」を求めあうのは、やはり「やさしさ」世代のためというべきか、「やさしさ」の失われた時代のせいというべきであろうか。

なお、親しくなりたい同性のタイプを同じ項目でたずねたものが、つぎの図6であり、この図でもやはり「やさしさ」世代の特徴がよく表れている。

つまり、男女ともに、異性に対してのみならず同性に対しても「やさしさ」を求めあっているのが、現在の中学生の姿なのであろう。つぎに、角度を変えて、「異性にもてる子

とはどんなタイプの子かをさぐっていきたい。

図7-Aは、男子から見てもてる女の子のタイプをたずねたものである。ここでも図5、図6の結果と同じく第1位には、①「顔やかっこうはふつうの子だが、誰にでも親切であたたかい感じの子」がきており、⑦「ちょっと不良っぽくてツッパッタ感じで決めている子」や⑧「抜群の成績だが、少し冷たい感じもする子」といった、いわゆる「ツッパリ」や「優等生」の女の子は男の子にもてないと答えているのである。

図7-Bが、女子から見てもてる男の子のタイプをたずねたもので、まったく男子の場合と同じく、というよりむしろ、もっと極端に親切さや冗談ばさを求める傾向が得られている。

男子にとっても女子にとっても、「ツッパリ」や「優等生」はもてず、「ふつうだが、やさしい子」がもてると考えられている。しかし、このやさしさはわかりやすいように見えて、その実態をつかみにくい。そこから性に伴う悩みがでてくると考えられる。

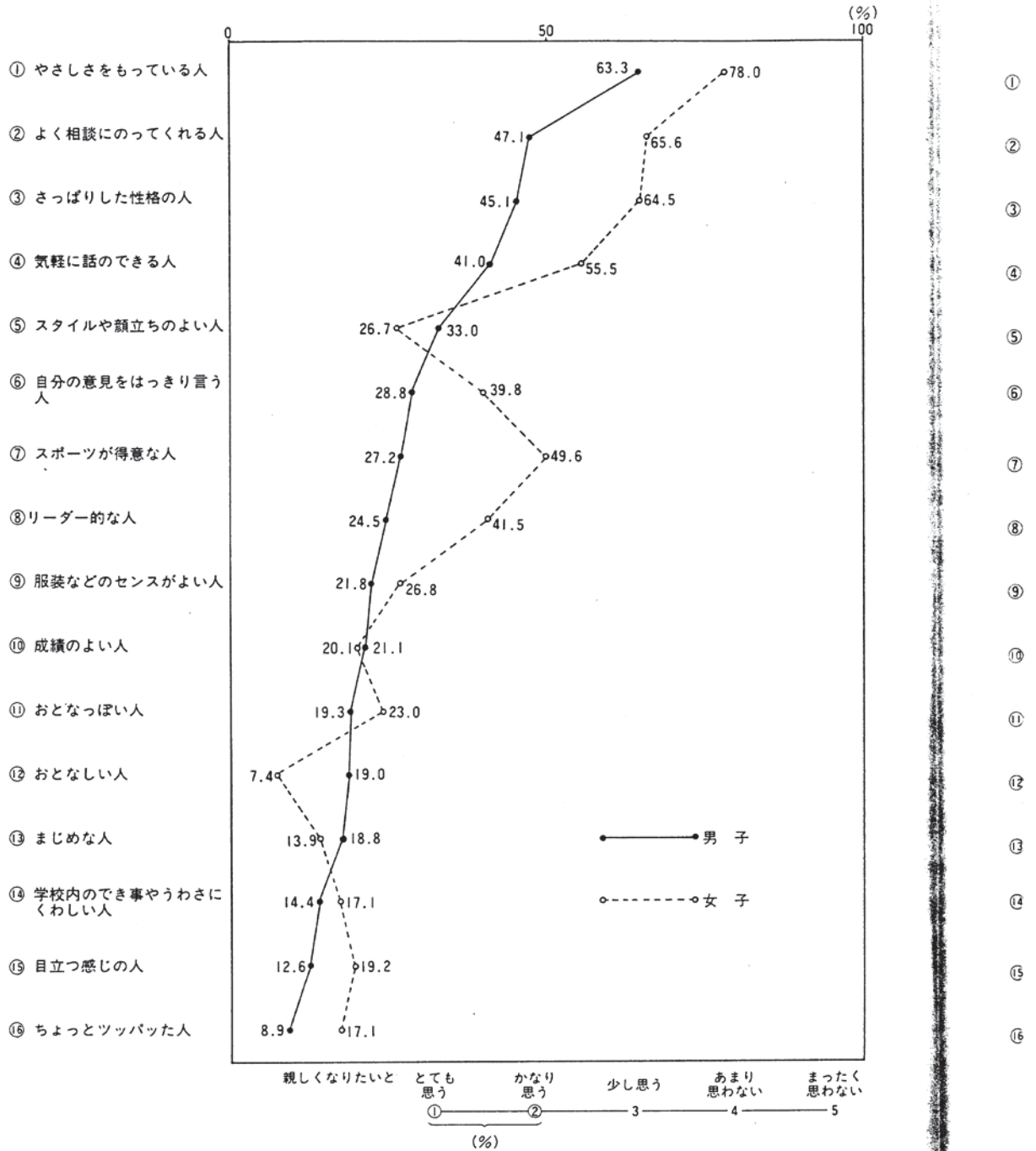
図8は異性などに関する悩みについて、「何度もある」「ときどきある」「1、2度ある」を合わせた数値の高いもの順に①から⑬までならべたものである。なお、「何度もある」「ときどきある」「1、2度ある」のそれぞれの数値も示しておいた。

この図によれば、全体として、悩みをもつ子が少ない。異性を真剣に考えはじめる前の年齢なのであろうか。そうした中で悩みの第1位に①「好きな人がいるが片思い」があがってくる。

それでは、今の中学生たちは、特定の好きな異性がいるのであろうか。つぎに、好きな異性について考察をすすめてみよう。

(図5) 親しくなりたいと思う異性の子

→やさしさをもらった人

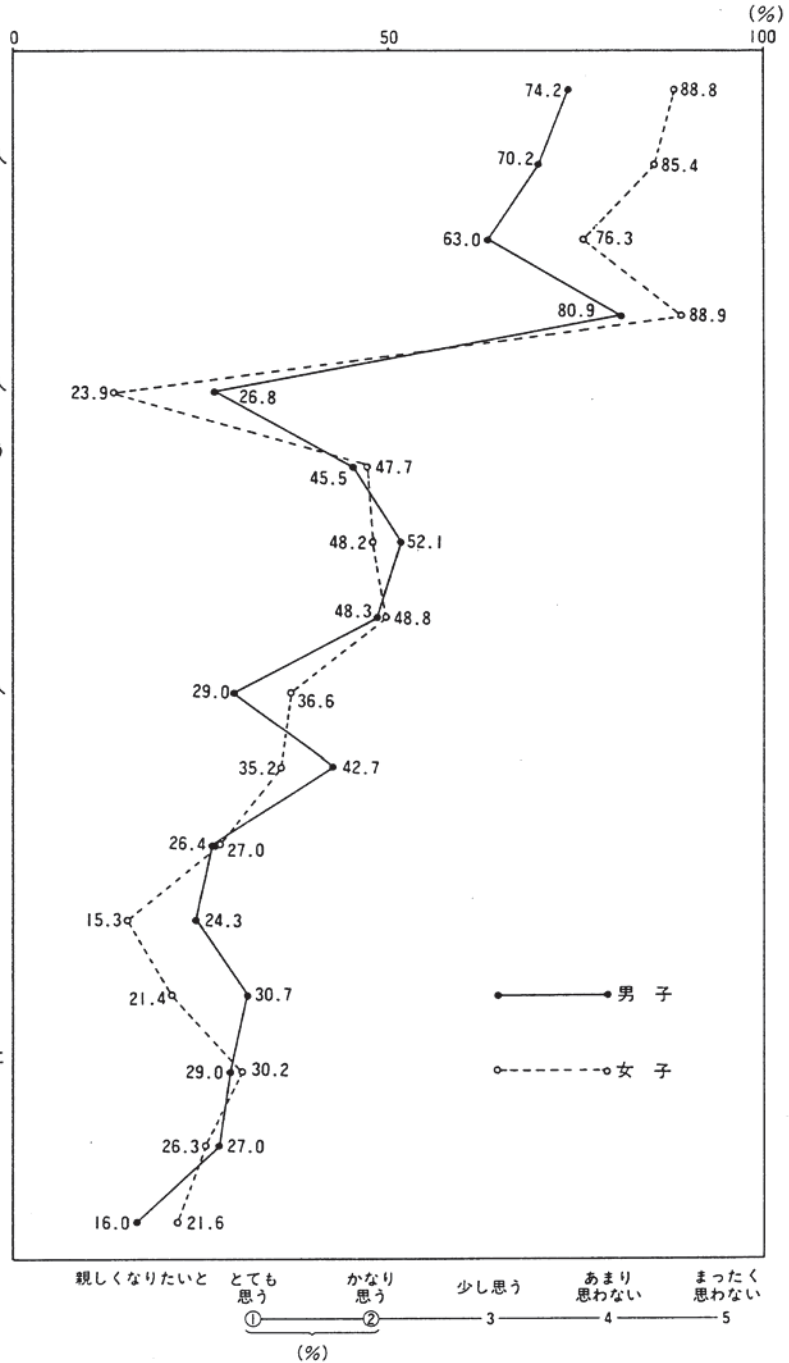


(図6) 親しくなりたいと思う同性の子

→ ここでもやさしさを求める

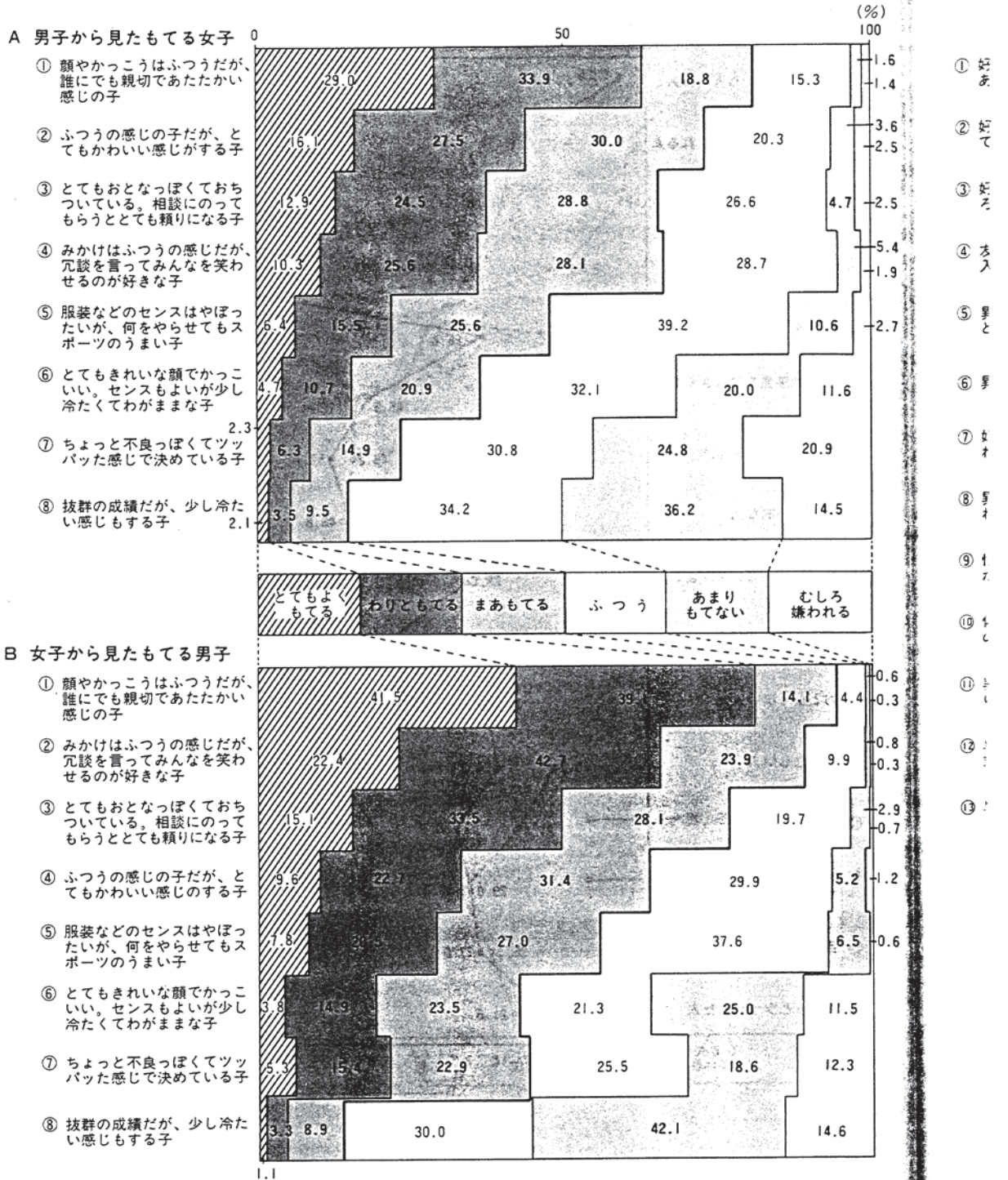
%)  
00

- ① やさしさをもっている人
- ② よく相談ののってくれる人
- ③ さっぱりした性格の人
- ④ 気軽に話のできる人
- ⑤ スタイルや顔立ちのよい人
- ⑥ 自分の意見をはっきり言う人
- ⑦ スポーツが得意な人
- ⑧ リーダー的な人
- ⑨ 服装などのセンスがよい人
- ⑩ 成績のよい人
- ⑪ おとなっぽい人
- ⑫ おとなしい人
- ⑬ まじめな人
- ⑭ 学校内のでき事やうわさにくわしい人
- ⑮ 目立つ感じの人
- ⑯ ちょっとツッパツた人



(図7) 異性にもてる子

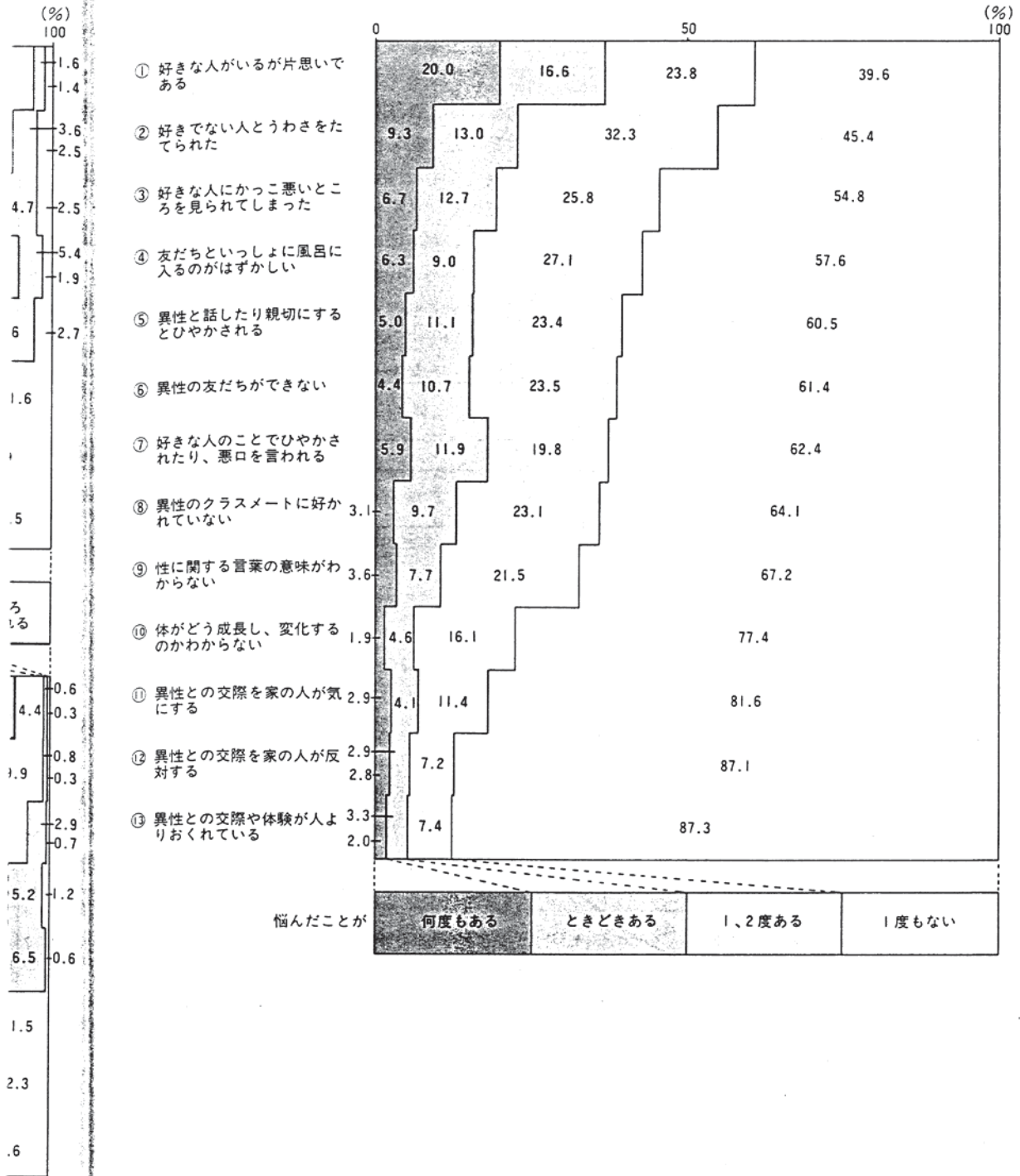
→親切であたたかい感じ





(図8) 性に関する悩み

→片思いが第1位



### 3. 男女交際の子備軍

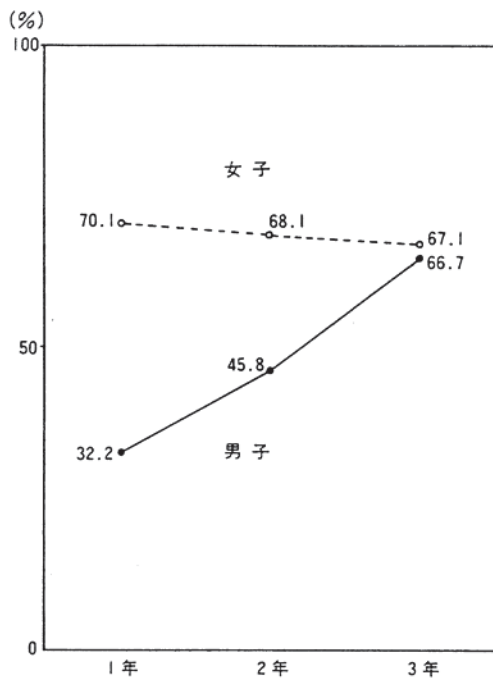
図9-①は、男女別に好きな異性がいるかどうかをたずねたものである。男子で好きな女の子がいる割合は45%、女子では68%にのぼっている。全体としても5割強の中学生た

(図9) 好きな異性

→心のうちに好きな子、女子は中1から

① 性別	いる		いない		(%)
	男子	女子	男子	女子	
男子	45.0		55.0		
女子		68.3		31.7	

② 好きな異性がいる割合×学年・性別



ちか  
るこ  
ら  
に子  
その  
一定  
でに  
てし  
中学  
3年  
好き  
も  
の中  
じて  
と見  
ま  
いお  
に子  
こ  
てい

(言

姿

ちが心のうちで好きな異性があると答えていることになる。

好きな異性があるかどうかを学年別、性別にみたものが、図9-②であるが、女子ではその割合は学年の上昇とはかかわりなくほぼ一定している。女子は成熟が早いからか、すでに中学1年の時点で好きな男の子を見つけてしまうようである。これに対して、男子は中学1年では32%だった割合が、2年46%、3年67%と着実に増加し、学年を追うにつれ、好きな子の割合が高まっている。

もっとも、中学生の場合、好きな異性は心の中の恋人で、自分がその相手を好きだと感じているほどには相手は自分のことを好きだと思っていないように思える。

表1は、好きな異性があると答えた中で、いわゆる「両思い」かどうかを学年別、性別にみたものである。

この表から、「相手も自分を好きだと思っている」「たぶん相手も自分を好きだと思っ

ている」を合わせて数値を見てみると、1年男子35%、2年男子35%、3年男子41%とほとんど変化していない。1年女子では27%、2年女子28%、3年女子30%とこれまた、たいした変化は示していない。どうやら、「両思い」が少数派という状況は3年間変わらないように思える。

そして「好きとも嫌いとも思っていない」をはじめ、「むしろ自分を嫌っている」「自分のことを知らない」のそれぞれの数値を加算すると、合わせて7割近い数値になる。好きな異性があるが「片思い」が中学生の平均的な姿なのであろう。

それでも、好きな人がいる中学生のうちの3割強の生徒たちが「両思い」なのであるから、異性とつきあっている中学生も何割かはいるのである。つぎの章では、男女交際についての意識と実態について述べていくことにしよう。

(表1) 好きな異性の自分に対する気持ち×学年・性別

→両思いは少数派

学年・性別		男 子			女 子		
		1 年	2 年	3 年	1 年	2 年	3 年
好きな異性がある	1. 相手も自分を好きだと思っている	17.4	15.5	21.0	7.7	9.2	13.1
	2. たぶん相手も自分を好きだと思っている	17.4	19.8	19.8	19.4	18.4	16.9
	3. 好きとも嫌いとも思っていない	45.7	51.2	45.6	56.1	59.8	50.7
	4. むしろ自分を嫌っている	6.5	4.6	3.7	2.6	3.4	3.1
	5. 自分のことを知らない	13.0	8.9	9.9	14.2	9.2	16.2

## 第II章 交際中の中学生



異性への関心が高まると、その異性といっしょにいたくなり、より親しくなりたいと思う。そしてしあわせなことに両思いになって交際にふみきるといふプロセスに入る。本章

では、男女交際の期間や程度、誰とつきあっているかなどについての現実の姿と、男女交際に対する意識とを明らかにしていきたい。

### 1. 男女交際の現実

好きな異性がいって、実際に交際に発展するケースは一体、全体のどれくらいいるのであろうか。

図10によれば、つきあっている異性のいる割合は、男子22%、女子25%と、4分の1程度であることがわかる。

そして、図10-②の学年別、性別を見てみると、1年男子22%、2年男子18%、3年男子39%と3年になるとかなりのパーセン

ジになっている。女子の場合は、1年女子21%、2年女子25%、3年女子29%と、3年間の変化はさほどない。

なお、交際中の中学生は2割強にしかすぎないが、残りの8割弱の多数派についても、交際をしていないからといって欲求がないわけではなく、図11によれば、68%もの中学生が異性の友だちが欲しいと答えており、しかも学年の上昇につれて欲求も高まっている。

それでは男女交際の内容について、つきにみていくことにしよう。

まず、交際期間については図12に示したとおり、全体では6か月以上つきあっている割合が76%となっており、つきあっている子は少ないが、つきあいはじめると6か月以上と、つきあいが安定し長期間化する傾向が認められる。

また、学年の上昇とともに、1年以上が、1年28%、2年37%、3年55%と増加し、逆

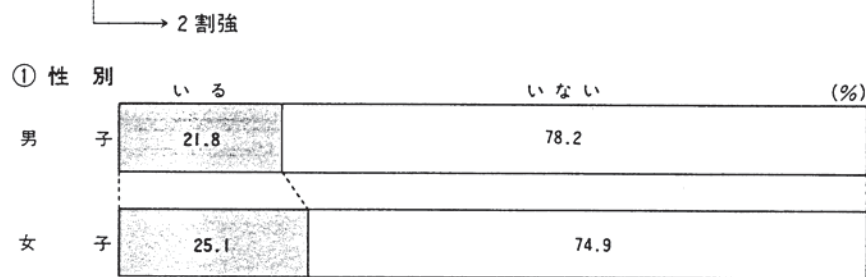
に、1年以下が低下していく様子が見られる。

なお、この数値は、つきあっている人がいると答えた者を100%としたものであることを付記しておく。

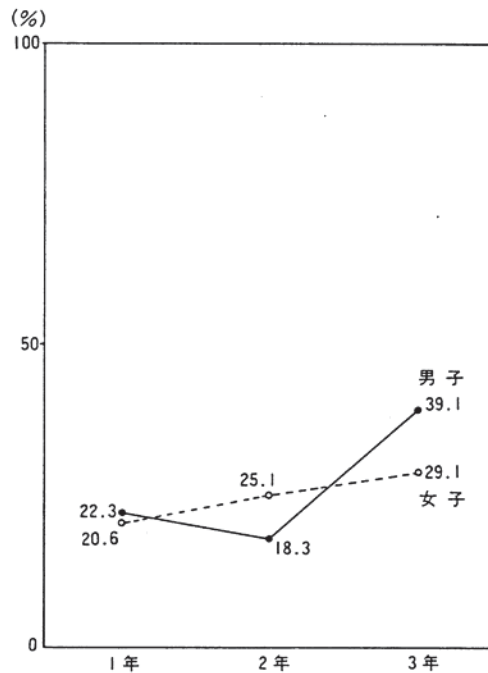
つきに、交際している相手について、男女別にたずねたものが図13である。この図中の数値も、つきあっている人がいると答えた者を100%としたものである。

この図によれば、男女を問わず、つきあっている相手は、「同じクラスのクラスメイト」

(図10) つきあっている異性



② つきあっている異性がいる割合×学年・性別



つきあっている異性

女子21  
3年間

はすぎ  
こも、  
いいわ  
学生  
しか  
いる。

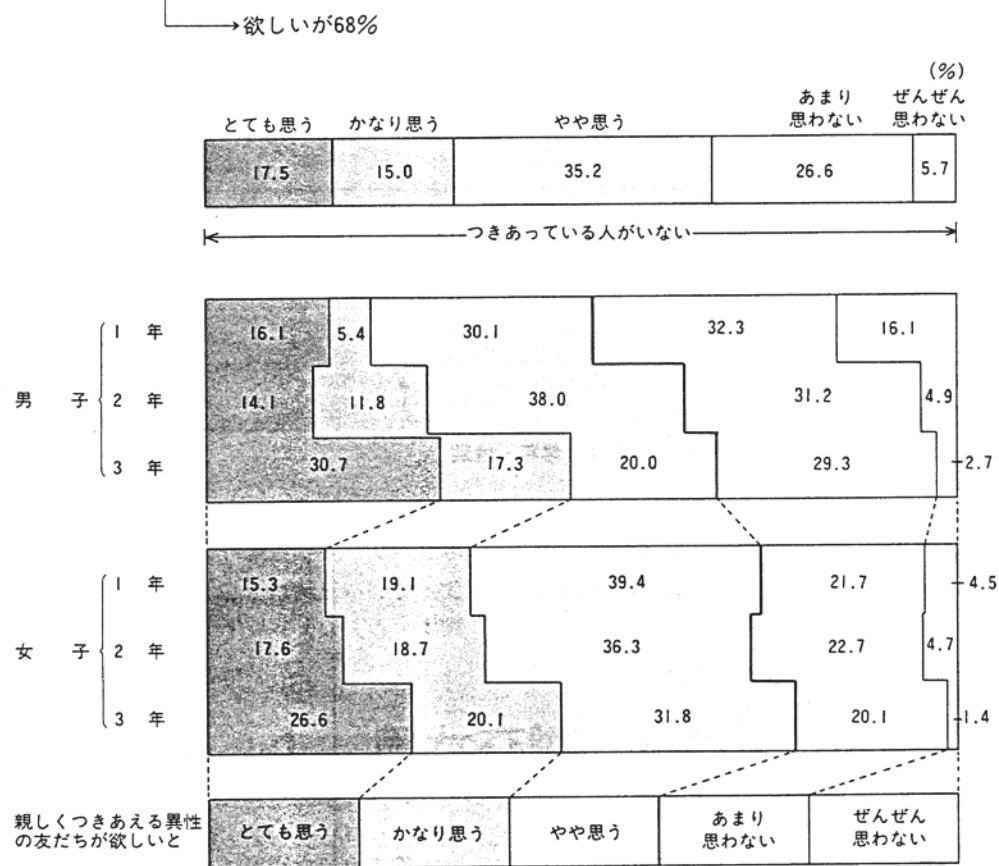
がもっとも多く、次いで「同学年だがちがうクラスの人」となっており、クラスがえなどを考慮するならば、交際の範囲はほとんど同じクラスの人とに限られているのがわかる。ただし、女子の場合、上級生や高校生のような年齢が上の人も認められはするが、6割近くが同年齢である場合は男子の場合と共通している。

最後に、交際の質についてたずねてみたのが表2である。なお、つきあっている人がいる者のうちの割合を右に、全体に対する割合を左はしに示してある。

①「休み時間に話をする」から順に、つきあう程度がすすんでいくわけであるが、①「休み時間に話をする」のは、つきあっている人がいる者のうちの割合の全体で37%、次に④

「あま  
りな  
い  
①  
い  
な  
い

(図11) 異性の友だちが欲しいか



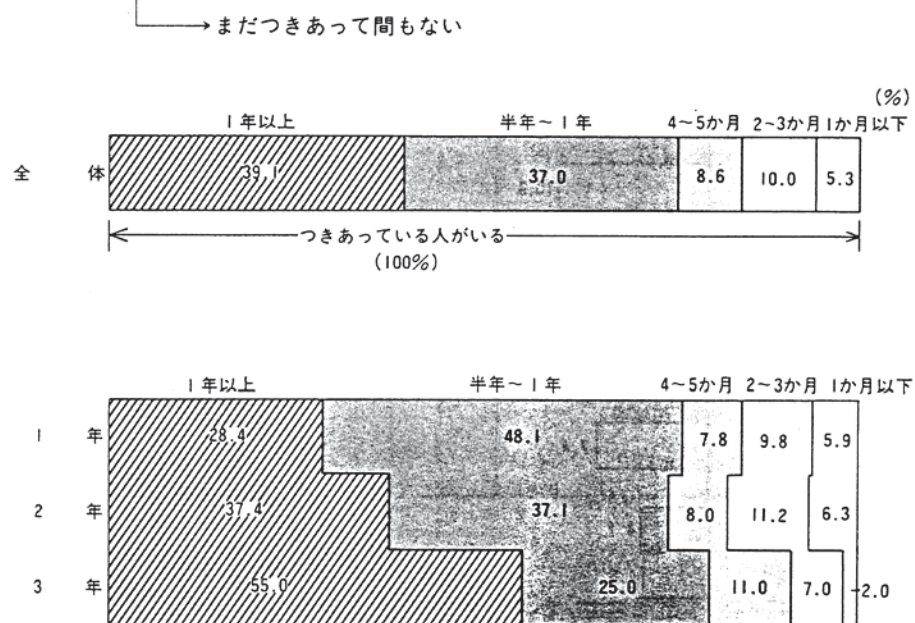
の  
い  
合  
き  
休  
人  
④

「電話でいろいろ話す」27%、②「シャープペンシルなどのものの貸し借りをする」18%などとなる。

これを全体に対する割合で見てもみるならば、①「休み時間に話をする」11%、④「電話でいろいろ話す」8%、②「シャープペンシルなどのものの貸し借りをする」5%ときわめて少ない。

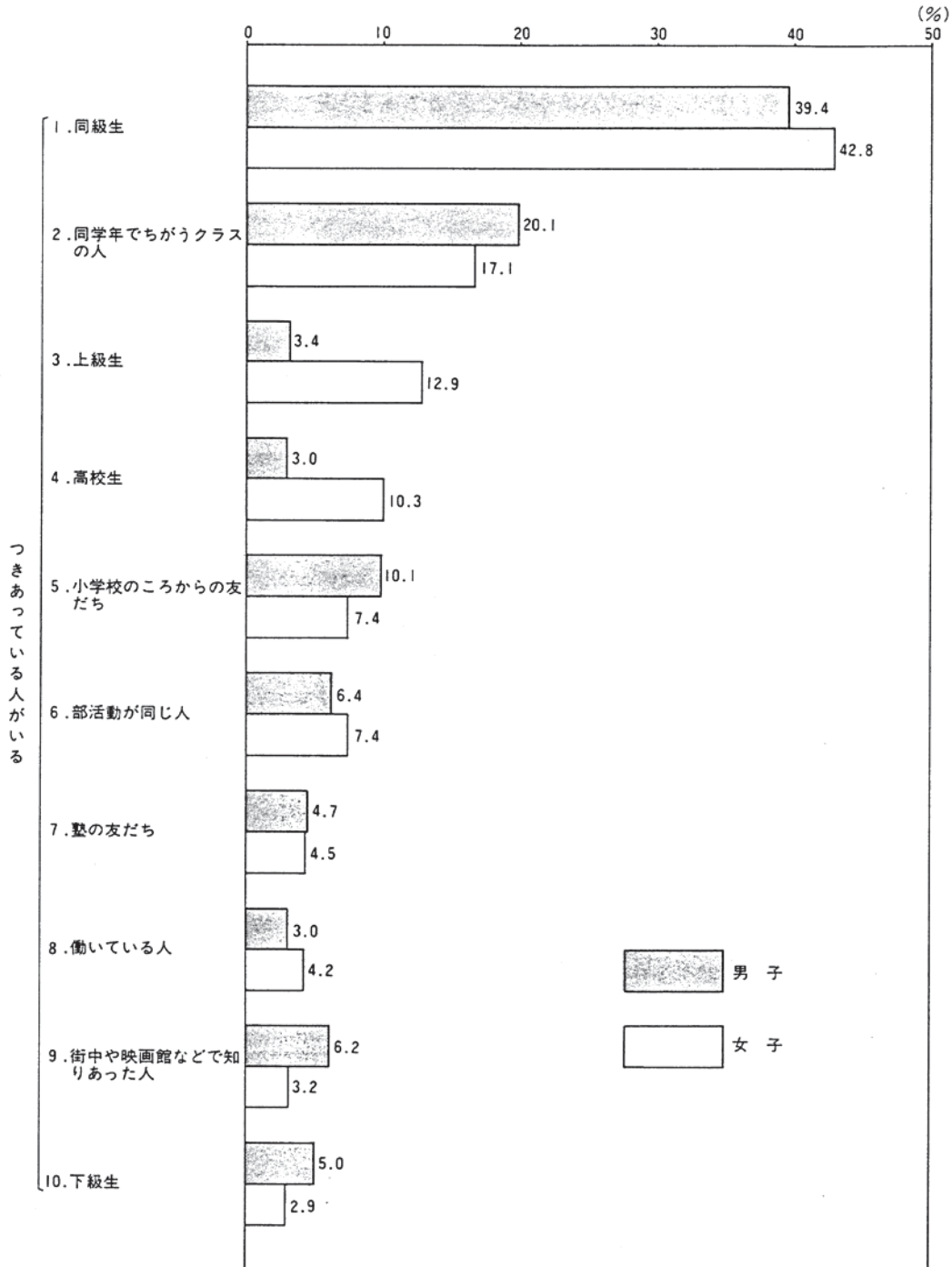
いずれにせよ、全体としてみると、中学生たちの行動は節度を保っており、具体的には交際をしている中学生は電話で話し合うなどと、まったく健全で、ちまたで言われているような性の乱れはごく少数に限られているのがわかる。そこで、つぎに、男女交際についての意識の中で、その健全さが真実であるのかどうかをさぐっていくことにしたい。

(図12) 交際期間



(図13) つきあっている相手

→ 同級生が多い



男  
多  
た  
ら  
の  
て  
く  
わ  
こ  
ン  
ナ  
し  
い  
と  
い  
に  
「  
中  
い  
き



(表2) 交際程度

→ 節度あるつきあいが多い

(%)

	全体に対する割合	つきあっている人がいる者のうちの%			
		全 体	1 年	2 年	3 年
① 休み時間に話をする	10.5	36.6	40.3	32.4	46.0
② シャープペンシル等ものの貸し借りをする	5.0	17.5	14.2	14.2	31.6
③ いっしょに登下校する	3.2	11.2	10.8	9.3	17.5
④ 電話でいろいろ話す	7.7	26.8	15.0	27.6	36.8
⑤ 交換日記をする	2.2	7.5	6.7	8.5	5.3
⑥ グループでいっしょに遊びに行く	3.4	11.9	5.0	10.4	23.7
⑦ 2人で遊びに行く	3.7	12.9	7.5	12.3	20.2
⑧ その人の家をたずねる	3.2	11.0	8.3	10.1	16.7
⑨ 手をにぎって歩く	1.8	6.3	5.0	6.3	7.9
⑩ 腕を組んで歩く	1.8	6.2	1.7	7.1	7.9
⑪ キスをする	2.1	7.2	6.6	7.1	7.9
⑫ セックスをする	1.3	4.9	4.3	5.2	4.8

(複数回答)

## 2. 男女交際の意識

現実の行動レベルにおいて、きわめて健全な交際をしている中学生たちは、ひょっとしたら意識のレベルでは、かなりすすんでいるのではないだろうか。こうした疑問に答えてくれるのは、つぎの図14である。

この図は、①「異性とグループで映画やコンサートなどに行く」といった比較のおとなしい項目から、⑥「異性とセックスをする」というすすんだ項目にいたるまで、それぞれについて、「中学生ならするのがあたり前」「中学生ならしてもよい」「中学生では少しいきすぎ」「中学生ではかなりいきすぎ」「中

学生ではぜったいするべきでない」かどうかをたずねた結果である。それらをやや詳しく見ていくことにしよう。

まず、①「異性とグループで映画やコンサートなどに行く」については、「あたり前」と「してもよい」を合わせれば8割弱となり、グループ交際で映画やコンサートぐらいなら中学生でもしたってかまわないと考えているのがわかる。

同じように、②「特定の異性と交換日記をする」、③「特定の異性と登下校をしたり、映画やコンサートなどに行く」についても、6割

以上の者が中学生ならしてよいと肯定している傾向が得られている。

これに対して、ほぼ5割ラインに近づいており、意見の対立をまねいているのが、④「異性との交際で手をにぎったり腕を組んだりする」であり、この身体的なソフトなふれあいあたりが、現在の中学生がしてよいと考えているボーダーラインを構成している。

なお⑤「異性との交際でキスをする」、⑥「異性との交際でセックスをする」のふたつの項目については、肯定率は⑤で3割、⑥で1割にしからず、意識の面においても、多くの中学生が中学生らしさを大事に考えているのがわかる。

そうはいうものの、学年が上昇するにつれて、ボーダーラインに対する否定率が低下するのではないかと考えて、学年別、性別に数値をならべたものが表3である。

この表は、「中学生ではかなりいきすぎ」「中学生ではぜったいするべきでない」数値のみをとりだしたものであるが、学年の上昇

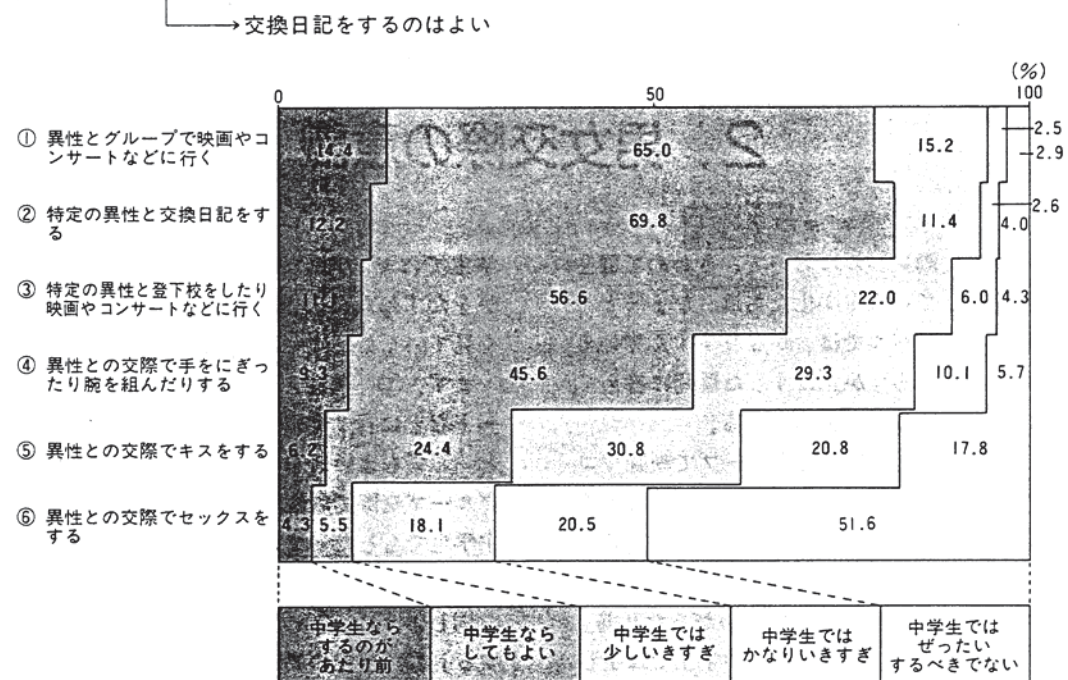
につれて否定率が低下している項目も見られる。

まず、男子においては、①「異性とグループで映画やコンサートなどに行く」から、⑥「異性との交際でセックスをする」にいたるまで、学年の上昇とともに否定率が低下しており、行動レベルではともかく、意識レベルではセックスに対する許容も、ある程度まで高くなっている様子がうかんでくる。

そして、女子のほうも、①「異性とグループで映画やコンサートなどに行く」から、⑤「異性との交際でキスをする」までの否定率が低下しており、頭の中ではそうしてもよいと思う生徒が増加している。しかしながら、セックスに対しては、否定率がたいして低下しておらず、男子ときわだったちがいを示している。

なお、付表として性教育の実践で知られているK女子中学校と他の中学校との数値の比較を示しておいた。数値は中学校3年生の女子のみのものであり、カッコの中は他の中学

(図14) 中学生の男女交際について



うけ  
ルー  
ハ、⑥  
たる  
して  
ベル  
まで  
  
ルー  
、⑤  
定率  
よら、  
低下  
示し  
  
れて  
の比  
の女  
中学

(%)  
100  
—2.5  
—2.9  
—2.6  
—0  
—3  
—7

校の3年女子の数値である。

この付表では、数値に差のある項目のみを選んで示してある。

①「特定の異性と登下校をしたり、映画やコンサートなどに行く」をはじめ、④「異性との交際でセックスをする」にいたるまで、「中学生ならあたり前」「中学生ならしてもよい」という肯定率がK女子中学校の数値が低くな

っており、ここらあたりに性教育についての成果が見うけられる。年齢が上がるにつれて、とかく性についての許容度の高まりがちな3年生の女子においても、しっかりとした性教育が行われると、意識の面でのゆるみが少なくなるのを、この表は暗示しているが、これだけではデータの充分といえないので、ここでは問題を指摘するにとどめておく。

(表3) 中学生の男女交際について×学年・性別

交際の程度	男 子			女 子		
	1 年	2 年	3 年	1 年	2 年	3 年
① 異性とグループで映画やコンサートなどに行く	11.9	8.5	3.2	3.8	2.1	1.5
② 特定の異性と交換日記をする	15.0	10.5	4.9	3.3	3.2	0
③ 特定の異性と登下校をしたり、映画やコンサートなどに行く	17.8	13.8	7.4	12.3	6.5	3.1
④ 異性との交際で手をにぎったり腕を組んだりする	24.6	11.3	9.8	23.7	12.8	5.2
⑤ 異性との交際でキスをする	53.4	40.4	23.6	49.0	36.3	20.5
⑥ 異性との交際でセックスをする	75.1	71.2	54.5	79.5	73.5	70.2

中学生なら  
するの  
あたり前  
1

中学生なら  
しても  
よい  
2

中学生では  
少し  
いきすぎ  
3

中学生では  
かなり  
いきすぎ  
④

中学生では  
ぜったい  
する  
べきでない  
⑤

%

<付表 中学生の男女交際について>

交際の程度	中 学 生 なら		中 学 生 だ け		
	あたり前	してもよい	少しいきすぎ	かなりいきすぎ	ぜったい するべきでない
① 特定の異性と登下校をしたり、コンサートや映画などに行く	12.7(15.3)	63.3(76.6)	19.0( 6.3)	5.1( 0.9)	0.0( 0.9)
② 異性との交際で手をにぎったり腕を組んだりする	11.4( 8.9)	43.0(74.1)	39.2(12.5)	5.1( 3.6)	1.3( 0.9)
③ 異性との交際でキスをする	2.6( 4.5)	23.1(51.8)	47.4(27.7)	16.7(11.6)	10.3( 4.5)
④ 異性との交際でセックスをする	0.0( 2.7)	5.4( 8.9)	13.9(25.9)	32.9(22.3)	48.1(40.2)

\*中3女子のみ 数値はK中学校(他中学校)

なお、つぎの図15、16、17につきあっている人の有無によって男女交際に対する意識や、親しくなりたい異性のタイプ、性に関する悩みがどのように変化してくるかを示しておいた。

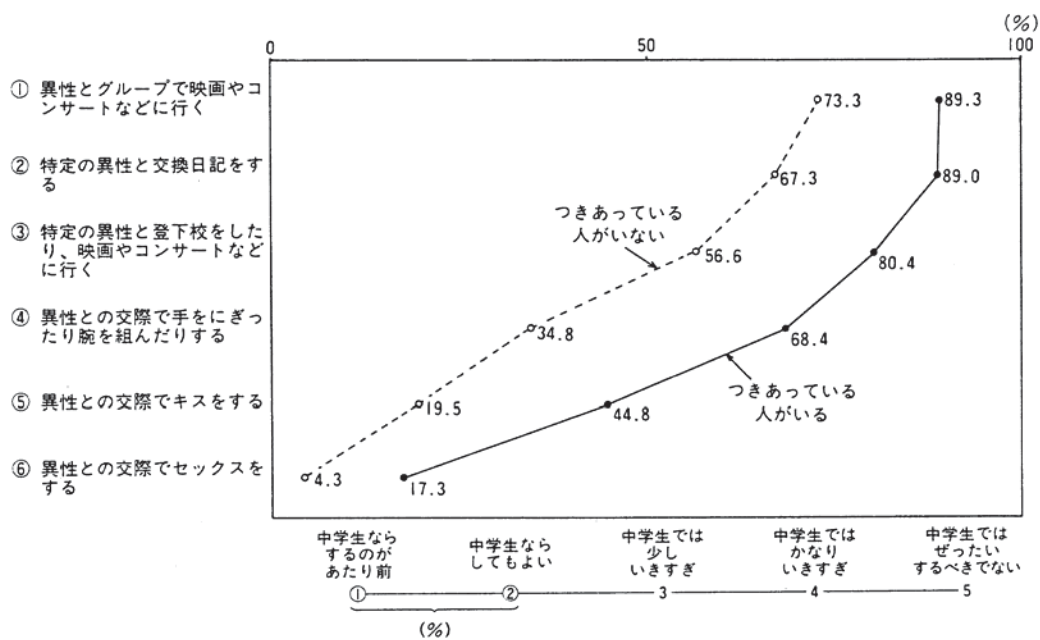
これらの図によれば、つきあっている異性がいる場合には、男女交際についての許容度

が高くなり、それなりに悩みも増してくるとい結果が得られている。全体として行動レベルでは、健全だというもの、つきあっている異性のいない多数派と比べ、つきあっている異性のいる少数派が、意識において、具体的な考えや悩みをもっているのが読みとれよう。

(区)

(図15) 中学生の男女交際について×つきあっている人の有無

→つきあう相手がいれば、もう少し深くつきあいたい

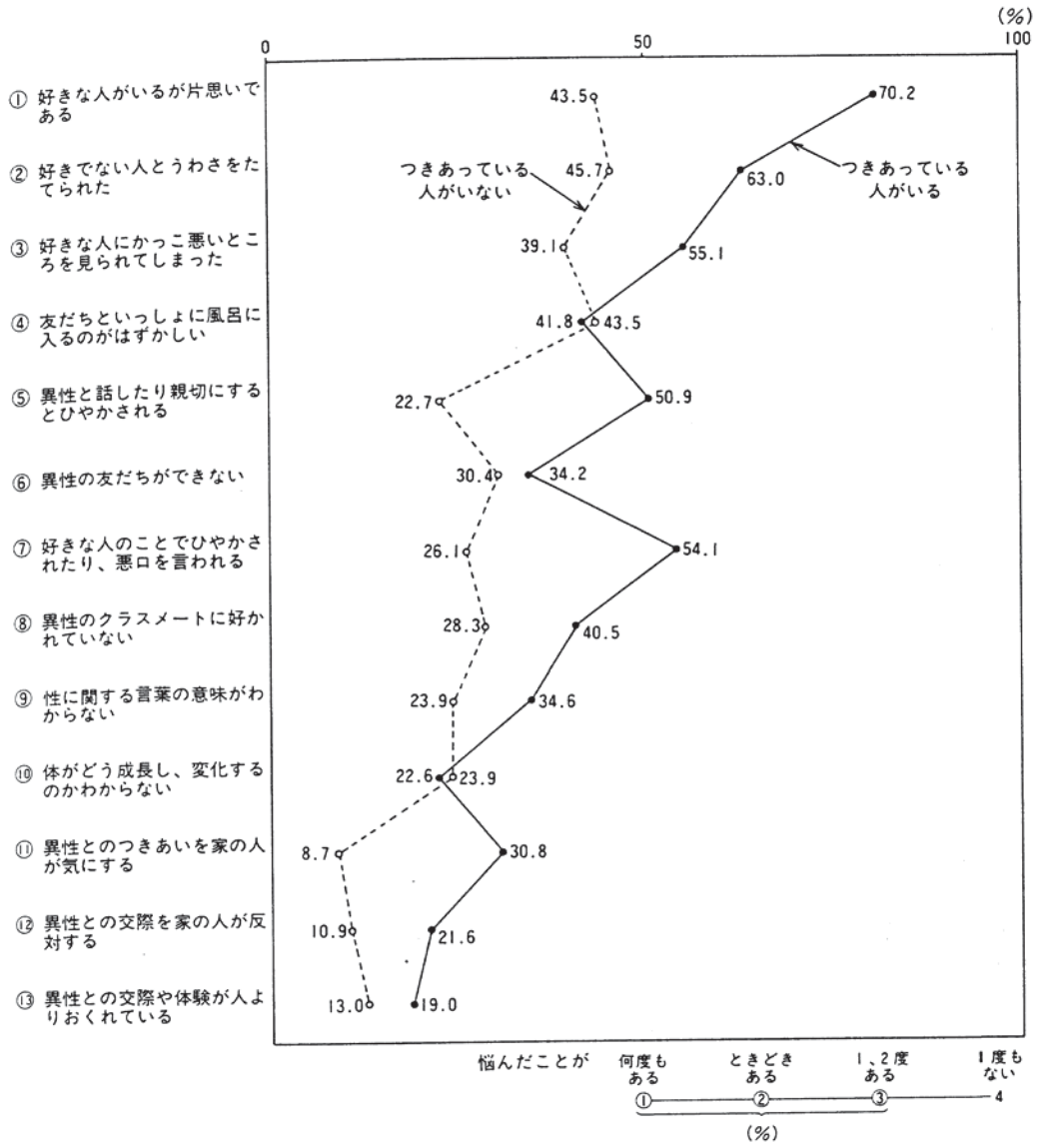


ると  
動レ  
うって  
うって  
こ、具  
とれ

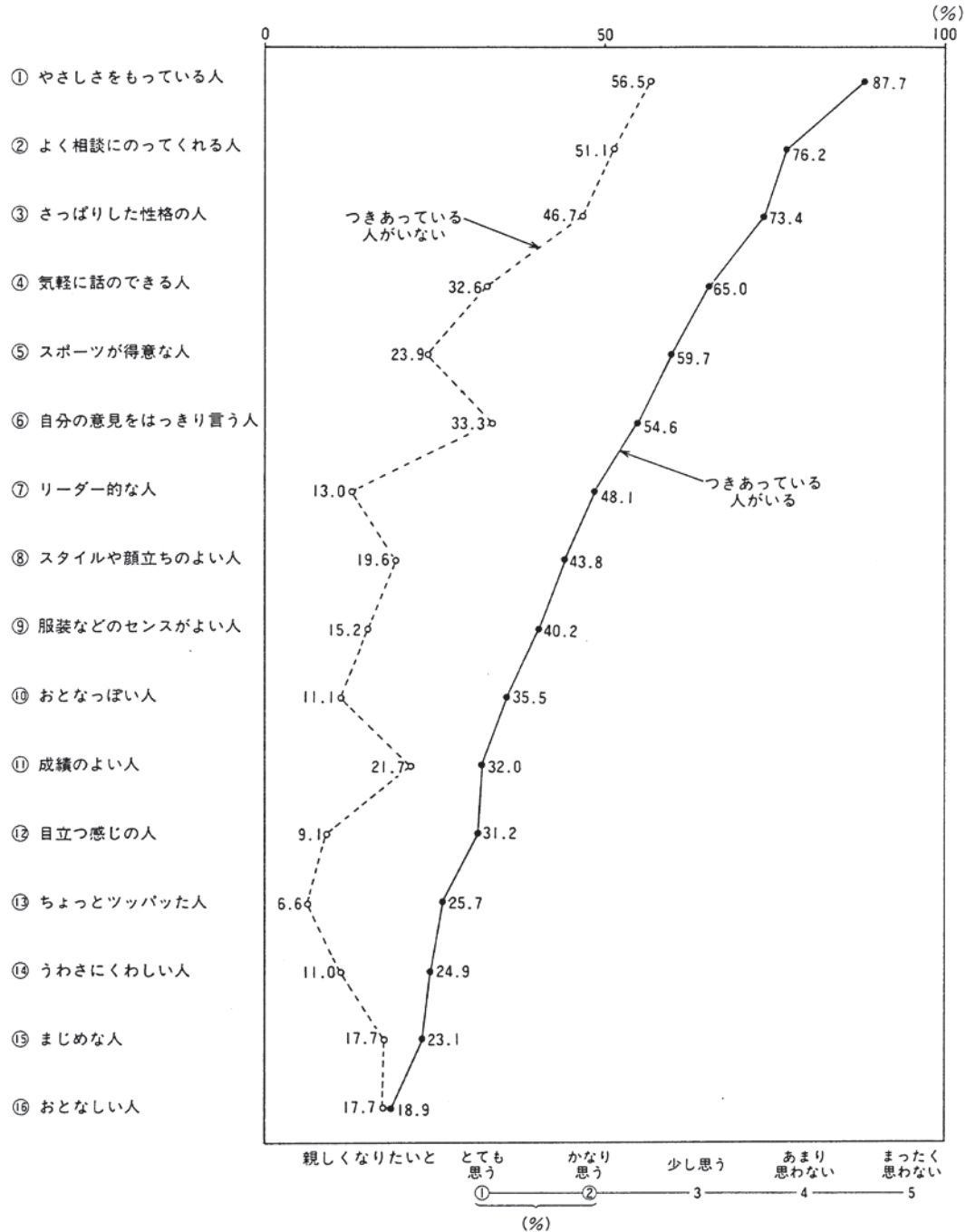
(図16) 性に関する悩み×つきあっている人の有無

(%)  
100

は、  
ない



(図17) 親しくなりたいと思う異性の子×つきあっている人の有無



に  
に  
う  
ジ  
子  
性  
に  
わ  
情  
か

き

## 第III章 両親の態度の影響



青少年の性の問題に関して、親たちは過敏に神経をとがらせる反面、その多くは、それに対してどう対処すべきなのか、できればそういったことに触れたくないという感情とのジレンマに立たされている。親たちにとって子どもの状態が一番つかみにくいのも、この性の領域であろうし、それだけにもっとも気になる問題でもあろう。もっとも身近にいるわが子のことがわからないため、マスコミの情報に左右されやすいのは、むしろ親のほうがかもしれない。これまでデータを見てきた限

りでは、中学生たちは性の情報をおとなたちにはわかりにくい方法で入手しているかもしれないが、現実の異性に対する意識や行動については、おとなたちがさほど過敏になる必要もないと思われるほどの節度をもっているという結果が得られている。

そこでこの章では、思春期の入口にあってもっとも親たちがとまどいもちがちな時期に、実際にわが子に対して親たちがどのような態度をとっているのか、また、その影響はどの程度のものなのかを探っていくことにしたい。

### 1. 異性との交際に対する両親の態度

図18は、もし ①「異性から電話がかかってきたら」、②「異性が自分の家に訪ねてきたら」、

③「異性とデートすることになったら」親たちはどのような態度をとるかを、それぞれ父

親、母親別に想定させたものを男女別に示したものである。全体に、きわめてきびしい態度をとる親はごく少数で、いちおうものわかり

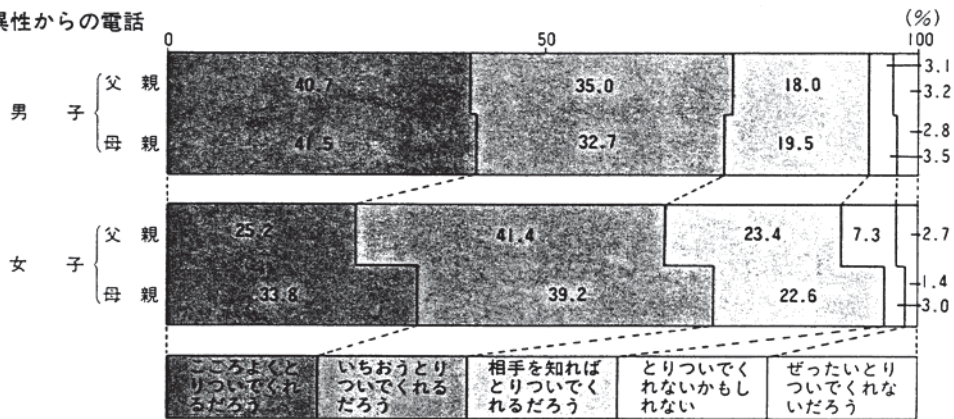
のよい態度を示してくれるだろうとの中学生たちの予想が得られている。しかし、さりとて、とくにガール・フレンド、ボーイ・フレ

ンはいそいそに、特の... 母るに41うと

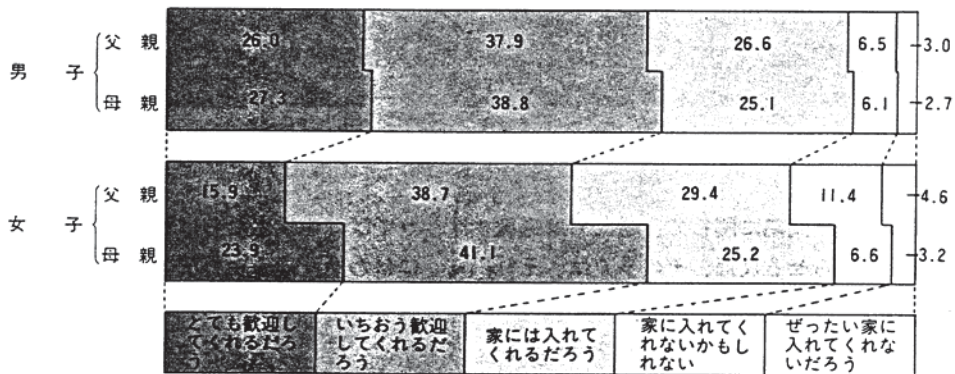
(図18) 両親の態度-1 <異性との交際>

いちおうはものわかりのよさ

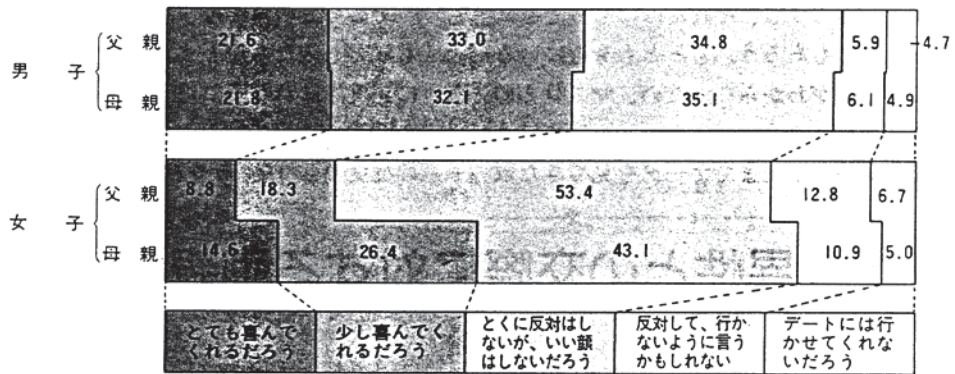
① 異性からの電話



② 異性の訪問



③ 異性とのデート



増っかうしか判らにち九 言にをかく多のと



ンドができたと言って喜んでくれる親もそうはいないだろうとの、親たちの微妙な感情がそのまま反映された結果も示されている。

電話、訪問、デートと交際の程度が深まるにつれて、親もだんだんかんばしい顔をしなくなるだろうとの予測は妥当な感じがするが、特徴的なのは、男子よりも女子に、とくにその傾向が顕著であり、それも母親よりも父親に女子に対して交際を認めたくない態度が見られる点であろう。男子は、父親では55%、母親では54%が「とても」「少し」デートすることを喜んでくれるだろうと答えているのに対し、女子になると、父親で27%、母親で41%にその数値が低下している。女の子のほうが心身共に成長が早いことと、何かあったときに女の子はとり返しがつかないという意

識、父親の娘に対して抱く特別な感情や、父親のほうがより青少年期の男子の性衝動に対して不安を抱いていることなどが、こうした結果に影響を与えていると考えられる。男兄弟がいる女子ならば、同じデートをするにしても、男の子なら喜んでくれ、女の子なら渋い顔をされることに不満を抱くかもしれない。しかし、いずれにしても、デートすることに対して規制を加えるであろう親は少ないようだ。無理に規制してもかえって反発してエスカレートしたり、かくれてこそこそされては困る、理解のない親だと思われるのがいやだ、という気持ちと、しかし不安だという気持ちとの葛藤が「とくに反対はしないがいい顔はしないだろう」に数値が集中した点に現れていて興味深い。

## 2. 家庭での性教育

子どもが年ごろになると、親のとまどいが増す。おとな扱いしたいような、そうかといって、そうしてもいけないような感じの毎日が続く。性についての感じがその典型であろうが、親たちの態度のほうは、昔と比べて少しは変化しているのであろうか。子どもたちが増加し続ける性情報を自分なりに認識し、判断する力をつけさせるために、親として何らかの働きかけを行うか、あるいは、いたずらに不安に思っているだけではなく、子どもたちが抱いている性のイメージを知るための努力を、親たちは行っているのでしょうか。

図19では、まず、両親の恋愛体験について話をしてくれるかどうか、また、自分の恋愛に対して相談にのってくれると思うかどうかをたずねた結果を示した。ほとんどの親たちが、自分の恋愛体験を子どもに語る事がなく、男子の父親で71%、母親で66%、女子の父親で67%が「ぜんぜん話してくれない」との結果が得られている。もっとも女子と母親との関係は特別なようで、何らかの形で少し

は話を交わした者が半数を超えている。同様に、子どもの側の恋愛についての相談も、「どちらともいえない」「あまりのってくれないだろう」「ぜんぜんのってくれないだろう」という消極的な親の姿勢を指摘する者が、男子で父親に対し71%、母親に対し65%、女子では父親に対して75%であるのに比べて、母親に対しては46%に数値が低下している。こうした話はやはり同性どうして語り合うほうが、わかりあえる要素が多いと考えられるが、それにしても父親の働きかけの少ないことが目につく。

さらに図20-①のように具体的な話にすすむと、性差はより顕著になる。女子は生理が始まるためもあり、体の変化や成長についてまったく母親と話をしたことがないという子は、むしろ少数派になるが、父親が娘に対してそういった話をする事はほとんどないようである。では父親は男の子に対しては母親よりも積極的に話をするかということではなく、68%の父親が男の子に対しても「ぜん

ぜん話してくれない」との結果が出ている。また図20-②のグラフに見られるように、本まで買い与えて性教育を行う者は両親ともごく少数に限られている。

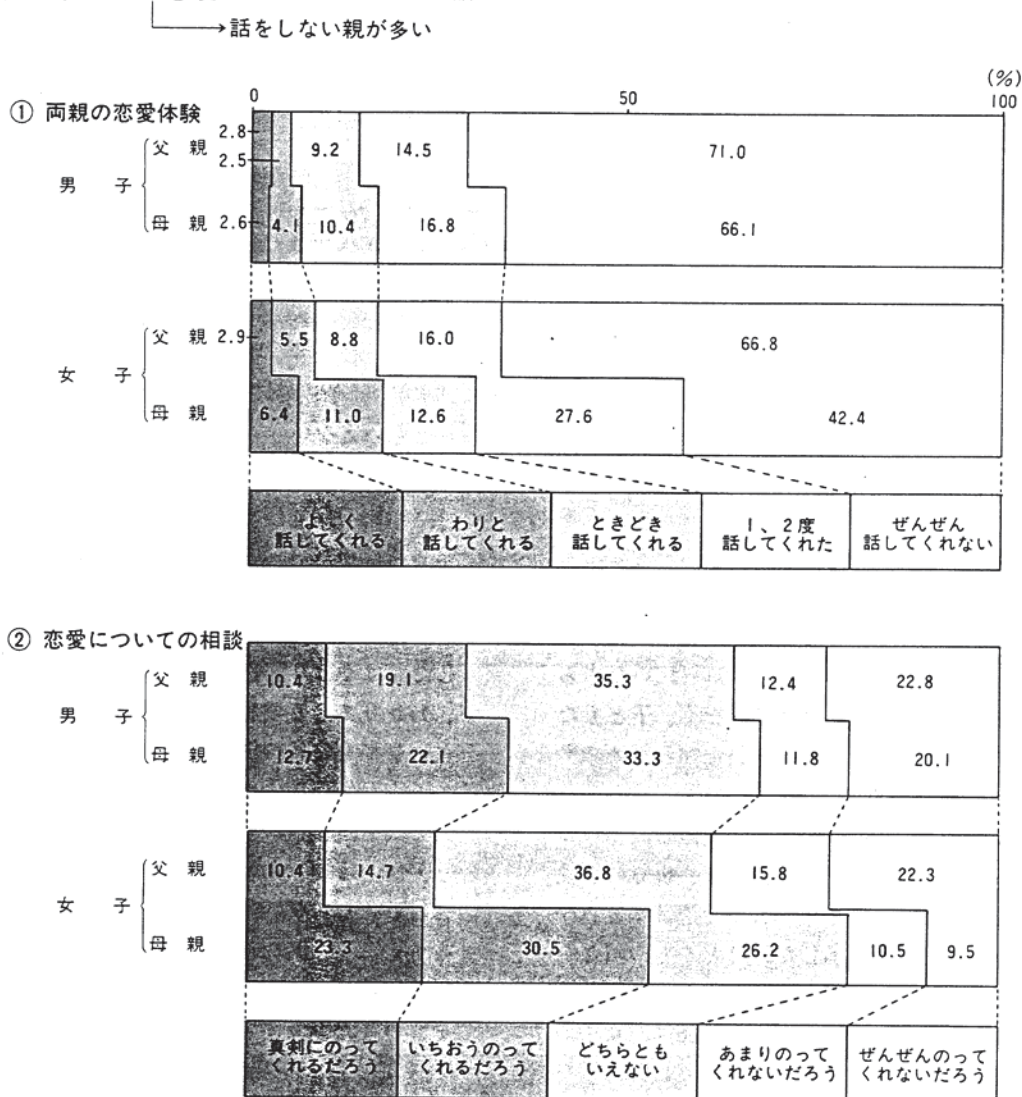
このように、性の領域にかかると及び腰になりがちな両親の姿が浮き彫りにされたが、では実際、親はどのような態度で子どもに接していけばよいかとなると、非常にむずかしい問題をはらんでいる。つぎに、両親の態度によって子どもたちにどのような影響がある

のかをクロス集計で探ってみることにしたい。

子どもが異性との交際を行っているかどうかと両親の姿勢の間に関連があるのかを調べたのが表4である。つきあっている子がいると答えている子の母親、父親は、つきあっている子がいない子の親よりも両親とも交際に開放的な感じがする。例えば、デートに関して喜んでくれる率が10%程度高くなっており、両親の恋愛体験について話してくれる率も父親で20%ちょっと高くなっている。しかしな

か  
わ  
直  
ぐ  
に  
て  
と  
面  
画

(図19) 両親の態度-2 <恋愛についての話>



たい、  
どう  
調べ  
いる  
って  
際  
に  
関  
し  
お  
り、  
も  
父  
し  
な

がら、これらは具体的な相手が現れて親が変わったためとも思われるので、両親の態度が直ちに子どもに反映されると考えられるほどの数値の差はない。したがって、両親が交際に対して理解を示してくれているからといって、異性とのつきあいが盛んになるということとはなさそうに見える。

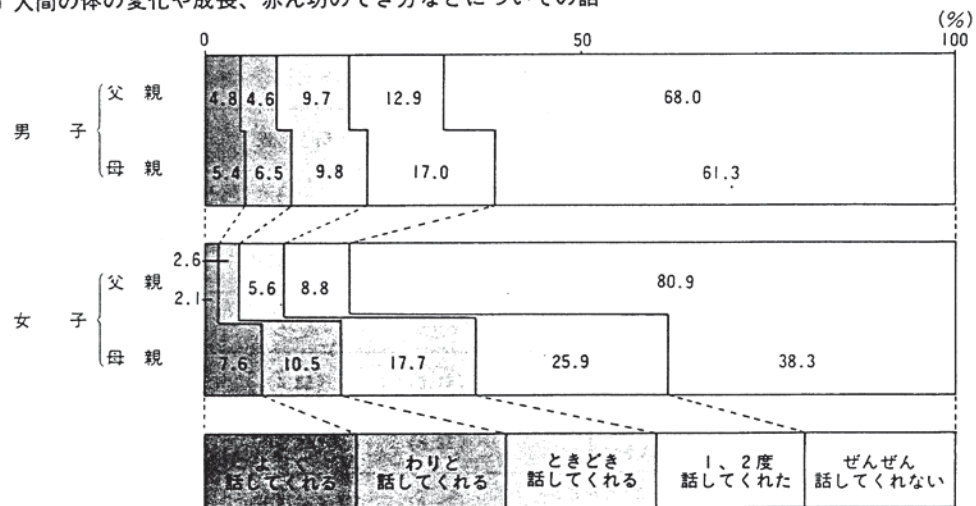
それでは具体的な行動面ではなく、意識の面ではどうかを調べてみよう。その前に両親の態度を類型化するために少し数字を操

作してみた。表5ではまず、図18から図20にあげた両親の項目間の関連を見るため、因子分析を行った。その結果、表5の1から6までの項目が共通因子をもつことがわかった。つまり、男女交際について電話をころよくとりついでくれる親はデートも喜んでくれ、それも夫婦間で態度が共通しているといえる。そこで表6のようにこの6つのアイテムの各尺度の点数を加算して個人得点を出し、その点数の多い者と少ない者で3つのグループに

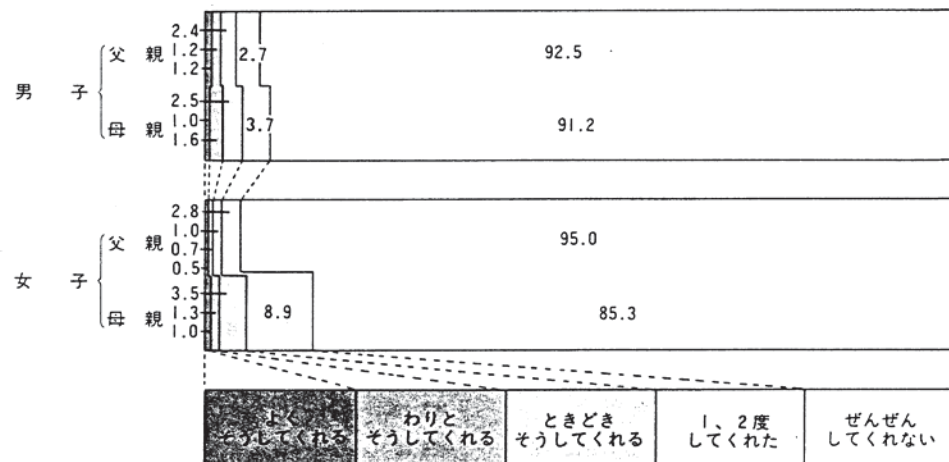
(図20) 両親の態度-3 <性教育について>

→ していない親が多い

① 人間の体の変化や成長、赤ん坊のでき方などについての話



② 性教育関連の本を買ってくれたり見せてくれたりすること



分類した。そして、個人得点が6点から11点の者をAグループ（＝交際に開放的な親をもつ子）とし、16点から30点までの者をBグループ（＝交際に厳格な親をもつ子）として、2つのグループを比較してみた。

表7は、そのA群とB群とで男女交際への感覚がどのようにちがうかを示したものである。「中学生ならするのがあたり前」と「中

学生ならしてもよい」の数値を合わせたパーセンテージを見ると、①の異性とのグループ交際で20%、③の1対1のデートで27%、⑤のキスで20%と、A群とB群との間に20%から30%近くの差が出ている。つまり、交際に対してオープンな親の子どもほど、異性との交際に「すすんだ」考えをもつ傾向があるといえそうである。

(表4) 両親の態度×交際中の子ども

→相手がいると、開放的になる

(%)

両親の態度		交際中の子ども	現在つきあっている相手が			
			いる		いない	
			父親	母親	父親	母親
異性との交際	① 異性からの電話	こころよく・いちおうとりついでくれるだろう	73.4	73.2	69.5	67.4
	② 異性の訪問	とても・いちおう歓迎してくれるだろう	68.3	74.8	47.4	57.7
	③ 異性とのデート	とても・少し喜んでくれるだろう	45.2	55.2	33.3	44.2
い恋て愛のにつ	① 両親の恋愛体験	よく・わりと・ときどき・1,2度話してくれる	41.8	53.4	19.6	39.0
	② 恋愛相談	真剣に・いちおうのってくれるだろう	32.8	48.9	21.8	32.6
性教育	① 体の変化などの話をする	よく・わりと・ときどき・1,2度話してくれる	31.8	56.5	21.7	40.1
	② 体の変化などの本を見せる	よく・わりと・ときどき・1,2度そうしてくれる	9.6	14.6	6.5	10.9

パー  
ープ  
、⑤  
%か  
際  
との  
ると

(表5) 父母の態度の類型

		因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
1. 父親	異性からの電話をとりつく	0.72097	-0.00151	0.03413	0.05629
2. 母親	"	0.69773	0.04057	-0.00296	0.09484
3. 父親	異性の訪問を歓迎	0.79572	0.07174	0.01648	0.07367
4. 母親	"	0.75582	0.10681	-0.03056	0.13293
5. 父親	異性とのデートを喜ぶ	0.72943	0.07502	0.05571	0.05805
6. 母親	"	0.70422	0.10277	-0.00053	0.11470
7. 父親	自分たちの恋愛体験を話す	0.07497	0.67680	0.12561	0.09717
8. 母親	"	0.06057	0.71903	0.04304	0.16934
9. 父親	恋愛の相談にのる	0.22870	0.22333	0.11524	0.62028
10. 母親	"	0.14457	0.24232	-0.00026	0.94427
11. 父親	性に関する話をする	0.11910	0.49744	0.36645	0.07554
12. 母親	"	0.05488	0.55740	0.25303	0.17728
13. 父親	性教育の本を見せる	0.00836	0.16726	0.87879	0.01602
14. 母親	"	-0.02109	0.25586	0.71149	0.06845

(%)

親

(表6) 交際に理解ある親〈加算点 集計方法〉

① 異性から電話がかかってきたとき

	こころよく とりついで くれるだろう	いちおう とりついで くれるだろう	どういふ人か はっきりすれば とりついでくれるだろう	とりついで くれないかも しれない	ぜったい とりついで くれないだろう
父 親	1	2	3	4	5
母 親	1	2	3	4	5

② 家に異性がたずねてきたら

	とても歓迎 してくれる だろう	いちおう 歓迎して くれるだろう	家には 入れてくれる だろう	家に入れて くれないかも しれない	ぜったい家に 入れてくれない だろう
父 親	1	2	3	4	5
母 親	1	2	3	4	5

③ 異性とデートすることになったら

	とても 喜んでくれる だろう	少し 喜んでくれる だろう	とくに反対は しないが顔も しないだろう	反対して 行かないように 言うかもしれない	デートには 行かせてくれない だろう
父 親	1	2	3	4	5
母 親	1	2	3	4	5

加  
算

※ ①～③の6項目の尺度の点数を加算して個人得点を出し、3つのグループに分類

得点	6～11点	30.8%…………… A = 交際に開放的な親をもつ子
	12～15点	35.6%
	16～30点	33.6%…………… B = 交際に厳格な親をもつ子

(表7) 中学生の男女交際×両親の態度

→親が開放的だと子どももその影響を受ける

交際に

A ……開放的な両親をもつ子ども

B ……厳格な両親をもつ子ども

(%)

	親の態度	中学生ならするの があたり前	中学生ならしてもよい	中学生では少し いきすぎ	中学生ではかなり いきすぎ	中学生ではぜった いするべきでない
① 異性とグループで映画やコンサートなどに行く	A	20.6	67.3	9.6	1.4	1.1
		└─(87.9)─┘			└─2.5─┘	
B		11.4	56.8	21.2	4.8	5.8
		└─68.2─┘			└─10.6─┘	
② 特定の異性と交換日記をする	A	18.1	70.6	7.7	1.4	2.2
		└─(88.7)─┘			└─3.6─┘	
B		9.4	62.3	17.3	4.4	6.6
		└─71.7─┘			└─11.0─┘	
③ 特定の異性と登下校をしたり、映画やコンサートなどに行く	A	16.8	62.9	15.0	2.9	2.4
		└─(79.7)─┘			└─5.3─┘	
B		8.3	44.1	29.3	10.5	7.8
		└─52.4─┘			└─18.3─┘	
④ 異性との交際で、手をにぎったり腕を組んだりする	A	13.5	54.8	23.9	4.6	3.2
		└─(68.3)─┘			└─7.8─┘	
B		7.1	33.4	33.4	15.9	10.2
		└─40.5─┘			└─26.1─┘	
⑤ 異性との交際でキスをする	A	9.3	32.3	32.0	16.3	10.1
		└─(41.6)─┘			└─26.4─┘	
B		4.8	16.6	26.1	22.9	29.6
		└─21.4─┘			└─52.5─┘	
⑥ 異性との交際でセックスをする	A	5.8	7.0	23.7	21.3	42.2
		└─12.8─┘			└─63.5─┘	
B		3.4	3.5	12.6	18.8	61.7
		└─6.9─┘			└─80.5─┘	

## 第IV章 性役割に関する意識



### 1. 結婚してからの暮らし方

性というと男女交際や性知識のことに関心  
が集中し、その結果、本来の意味での性——  
男女の区別や役割のあり方が第2義的な問題  
関心となりがちである。とくに青少年の性役  
割に関して、もっと目を向けてしかるべきな  
のではないかというデータをここで紹介して  
おきたい。

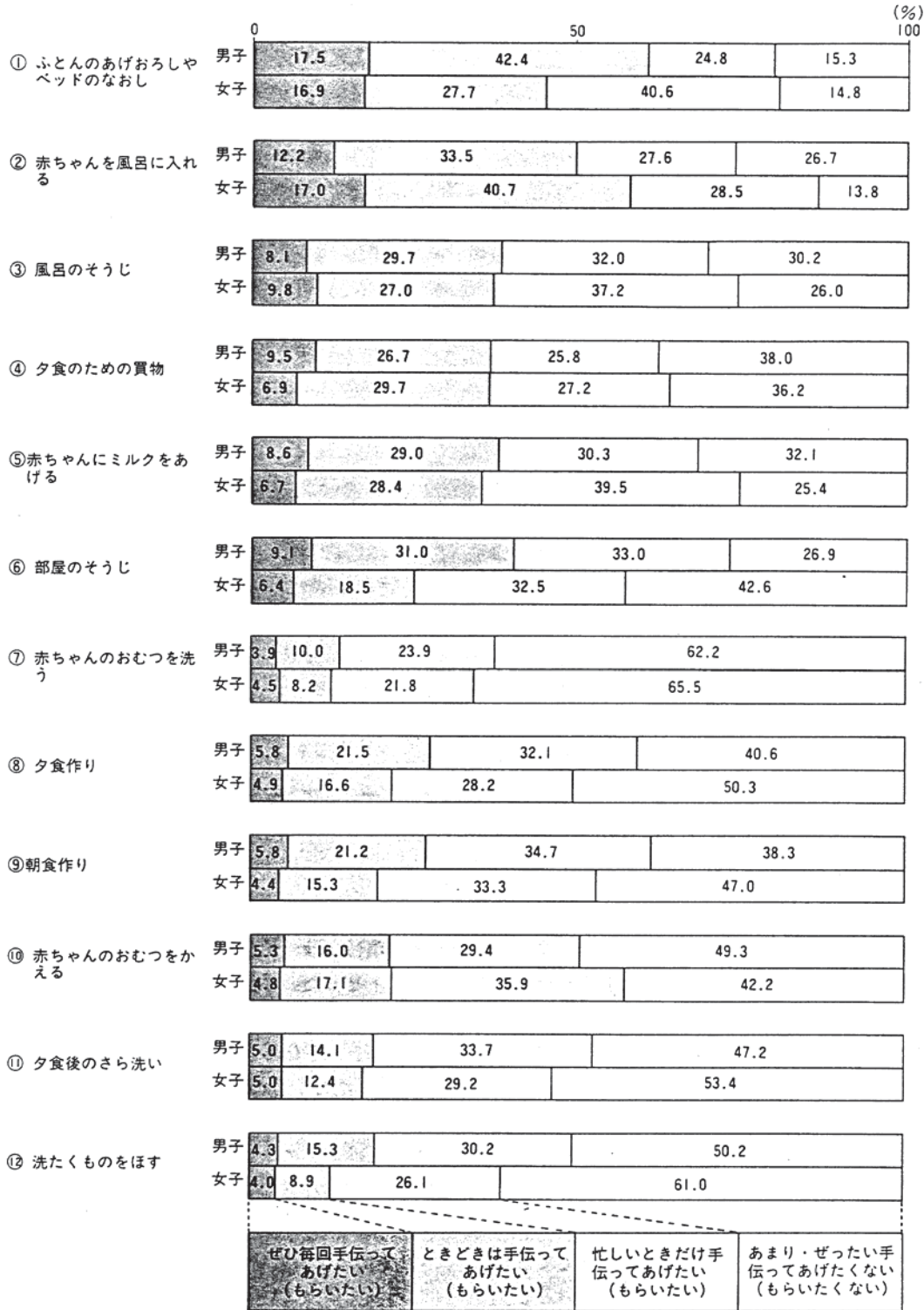
図21は、将来結婚してからのことを、男子  
には「家事を手伝ってあげたいか」、女子に  
は「家事を夫に手伝ってもらいたいか」とい  
う質問で、12項目の家事について答えてもら  
った結果である。①「ふとんのあげおろし」  
や②「赤ちゃんのお風呂入れ」では、「毎回」  
「ときどき」手伝ってあげたり、もらったりし

たいという割合が半数を超えるものの、③以  
下の項目では「忙しいときだけ」または「あ  
まり・ぜったい手伝わない」が増えてきて、  
⑪「夕食後のさら洗いを手伝いたくない」男  
子47%、「手伝ってもらいたくない」女子53  
%、⑫「洗たくものほし」になると、各々50%、  
61%にまでおよんでいる。さらに、目をひく  
のは⑥「部屋のそうじ」、⑧「夕食作り」、⑨  
「朝食作り」など、多くの項目で、男子の「手  
伝ってあげたくない」という数値より、女子  
の「手伝ってもらいたくない」という数値がむ  
しろ高くなっている事実であろう。これから  
先、女性が社会進出を果たし、家庭と仕事の  
両立をはかるためには夫の協力が不可欠のも

(%)  
った  
ない

(図21) 結婚してからの男性の家事

→それほどしなくてもよい



( ) 内女子



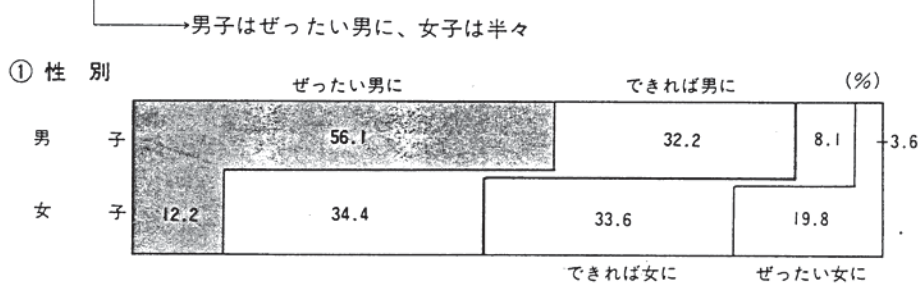


じとれるが、それを裏づけるのが図23である。男子は圧倒的に生まれ変わっても男に生まれたいという希望をもっているが、女子は半々に分かれ、ぜったい男に、ぜったい女にと答えた者はどちらもそう多くない。女に生まれて損だという意識が強ければ、今度生まれたときはぜったい男に生まれたいと思うはずだが、それほどの意気込みは感じられず、2年から3年になるとむしろ、女に生まれたいという割合が多くなっている。差別されている

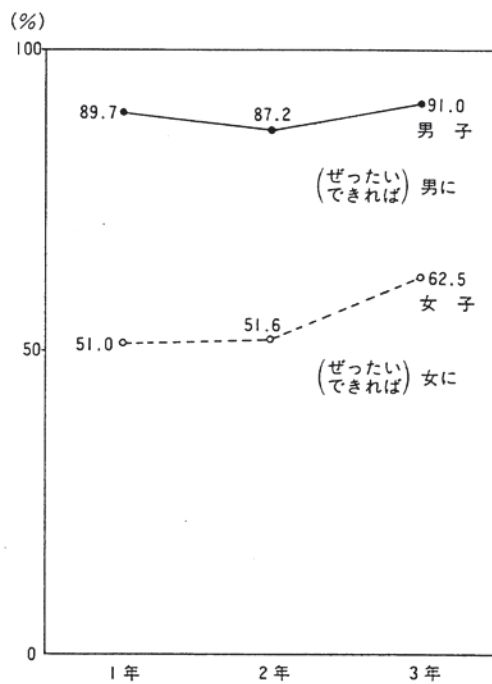
という意識をもつよりは、現実を逆手にとって、女性の有利点をそれなりに認めていこうとする姿勢の表れであろうか。それを明らかにするには、結婚後の生活をどうイメージしているかを知っておく必要がある。図24では、10項目にわたって結婚後にしたい暮らし方をたずねた。

図の数値は、「とてもそう思う」と「わりとそう思う」者を合わせた割合を男女別に示したものである。とくに目立っているのが

(図23) 生まれ変われたら



② 学年・性別



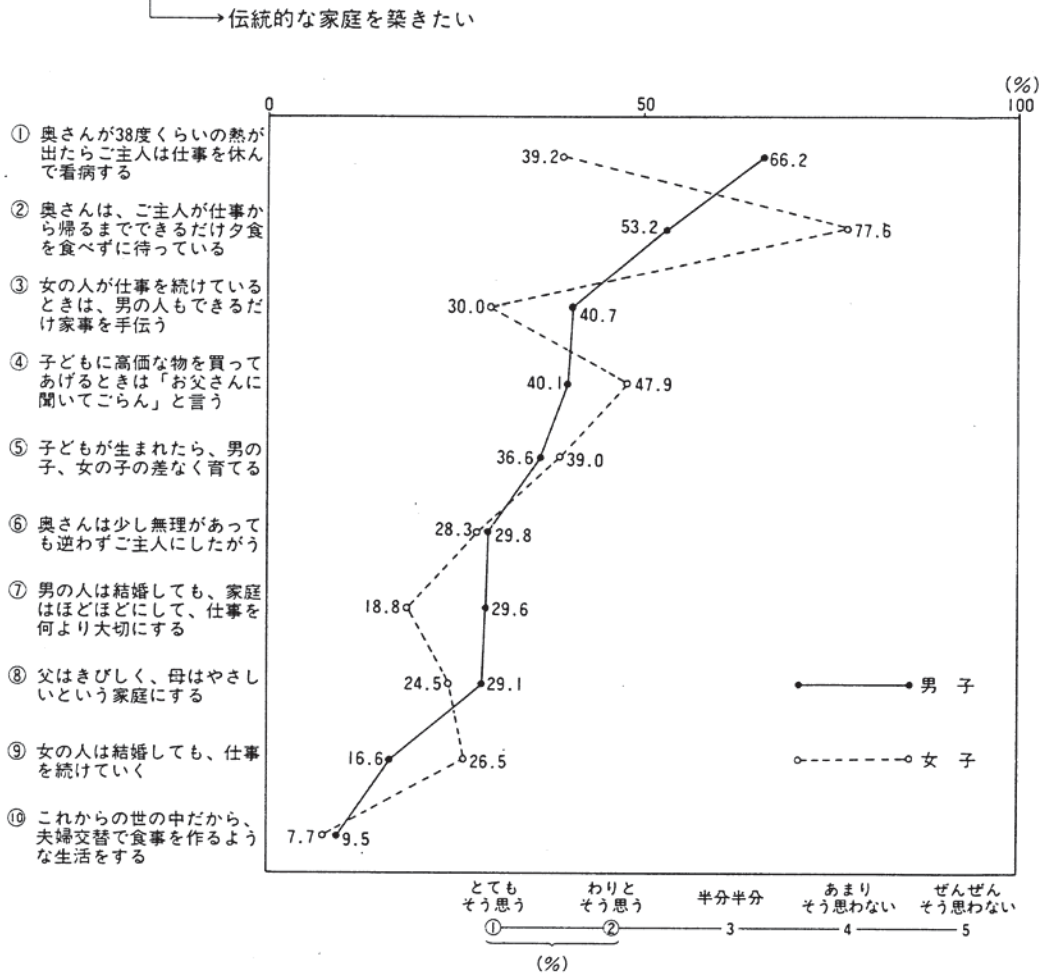
つ  
う  
か  
し  
で  
し  
わ  
に  
が

②の項目で、夫の帰宅まで妻が夕食を待っているという暮らし方に憧れているのが、男子で53%、女子ではさらにそれに2割以上多い78%という数値が得られている。また③でもさきほどの図21同様、妻が働いても夫が家事を手伝わなくて良いと思っている者は、女子のほうに多く、保守的な性役割に、女子が憧れてきている実態が出ている。

女子で結婚後も仕事を続けたいと思っているのは4分の1強にすぎず(⑨)、男子のほう

も仕事より家庭を大事にしたいという考え方が①、⑦などの項目にうかがわれる。中学生たちは家庭生活に、それも新しいスタイルの家庭ではなく、伝統的な性役割を踏襲した形の家庭生活に期待と夢を抱いているらしい。性差のない社会とも女性が自立を目指す社会ともいわれている現在、彼女らがこうした意識をもつことは不思議にさえ思えるが、その背景にあるものは何であろうか。現在、彼女らをとりにまわっている家庭に対しては図25に

(図24) 結婚後にしたい暮らし方



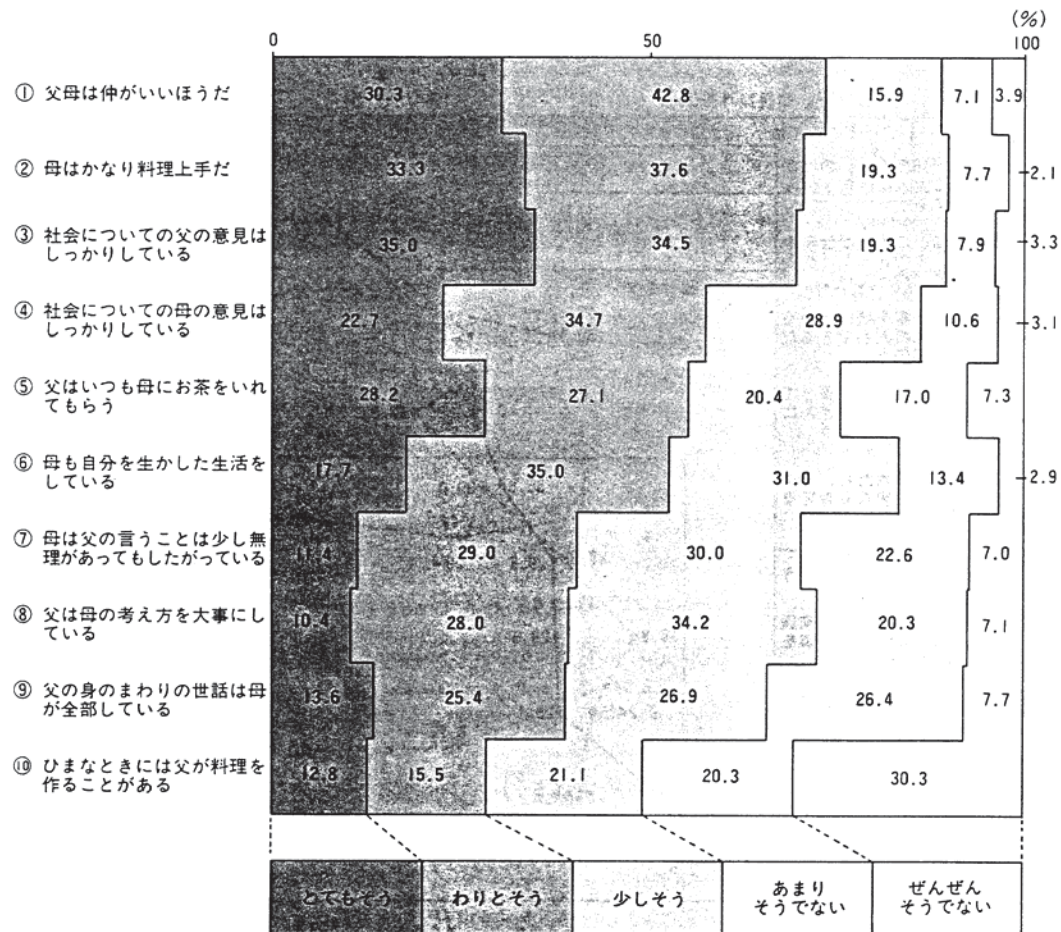
見られるように、両親の仲も良く、母親は料理上手で、社会的見識も両親ともにもっている、と概ね肯定的である。その家庭は、⑤「いつも父は母を呼んでお茶をいれてもらう」、⑨「父は身のまわりのことは全部母にしている」という伝統的な行動型を維持する家庭でもあり、居心地がよいからこそ、今の妻が夫につくす形の家庭生活を肯定的に見て

いるのかもしれない。

だが、実際に今の家庭生活と将来に自分がしたい暮らし方の間には相関はなく、表8に重回帰分析の結果を示したように、両親の夫婦関係が伝統的な家庭ほど、子どもも将来伝統型にあこがれるという傾向までは認められなかった。

(図25) 両親の夫婦関係

→夫婦の仲が良い



(表8) パスマトリックス  
子どもの性役割意識に対する父母の態度

(%)

両親の夫婦関係	結婚後にしたい暮らし方	妻が職業人なら夫は家事を手伝う	夫婦交替で食事を作る	男女の差なく子どもに手伝わせる
1. 父母は仲がいいほうだ		-0.02080	-0.03391	0.00016
2. 社会についての父の意見はしっかりしている		-0.03039	-0.09956	0.01476
3. ひまなどときには父が料理をすることがある		0.07331	0.08116	0.09118
4. 父の身のまわりの世話は母が全部している		0.01556	0.05620	0.04488
5. 父は母の考え方を大事にしている		0.03168	0.04952	0.00562
6. 母は父の言うことは少し無理があってもしたがっている		0.00413	-0.00810	-0.00359
7. 母も自分を生かした生活をしている		0.03297	0.00245	0.05132
8. 社会についての母の意見はしっかりしている		0.03294	0.03296	0.08235
9. 父はいつも母にお茶をいれてもらう		-0.06117	-0.07870	-0.00884

(注) パスマトリックス=項目間の関連を数量的に示そうとするもので、表中の数値は重回帰係数である-1から+1までの幅に位置しており、相関係数と同じように関連が強いと+1に近づく。

## 2. 男らしさ、女らしさのイメージ

以上のように性役割に関しては、保守的ともいえる中学生たちの考え方が明らかとなったが、性差に対する感覚がもっとも顕著に表れる男らしさ、女らしさのイメージを、彼らはどのように描いているのだろうか。

図26は「女の子だからしてはいけないと思うことはありますか」という質問で、中学生たちの抱く「女らしさ」の概念を探ろうとしたものである。「女らしく」という言葉にもっとも反発を感じる時期であろうと思われる予測に反し、男子にかなり近い数値で、「行儀の悪いかっこう」をしたり、「けんかにな

ると暴力をふるう」「乱暴な言葉をつかう」「髪の毛や服装をぜんぜん気にしない」「料理や裁縫が嫌い」等の行為は、女の子自らが「女の子らしくない」と思っているのである。また「口げんかで男の子に勝つ」、「男の子に助けを借りたくないと思う」というような男まじりの態度に「女らしくない」と感じる女子が半数近くみられる。女を型にはめこもうとする「女らしさ」の言葉のもつ威力に反発を感じ、それをうち崩そうなどという意識は薄いことが読みとれる。むしろ男子の好みそうな、従順でかわいい女の子らしさのイメージに女子

も合わせようとしているのではないかとさえ思える。

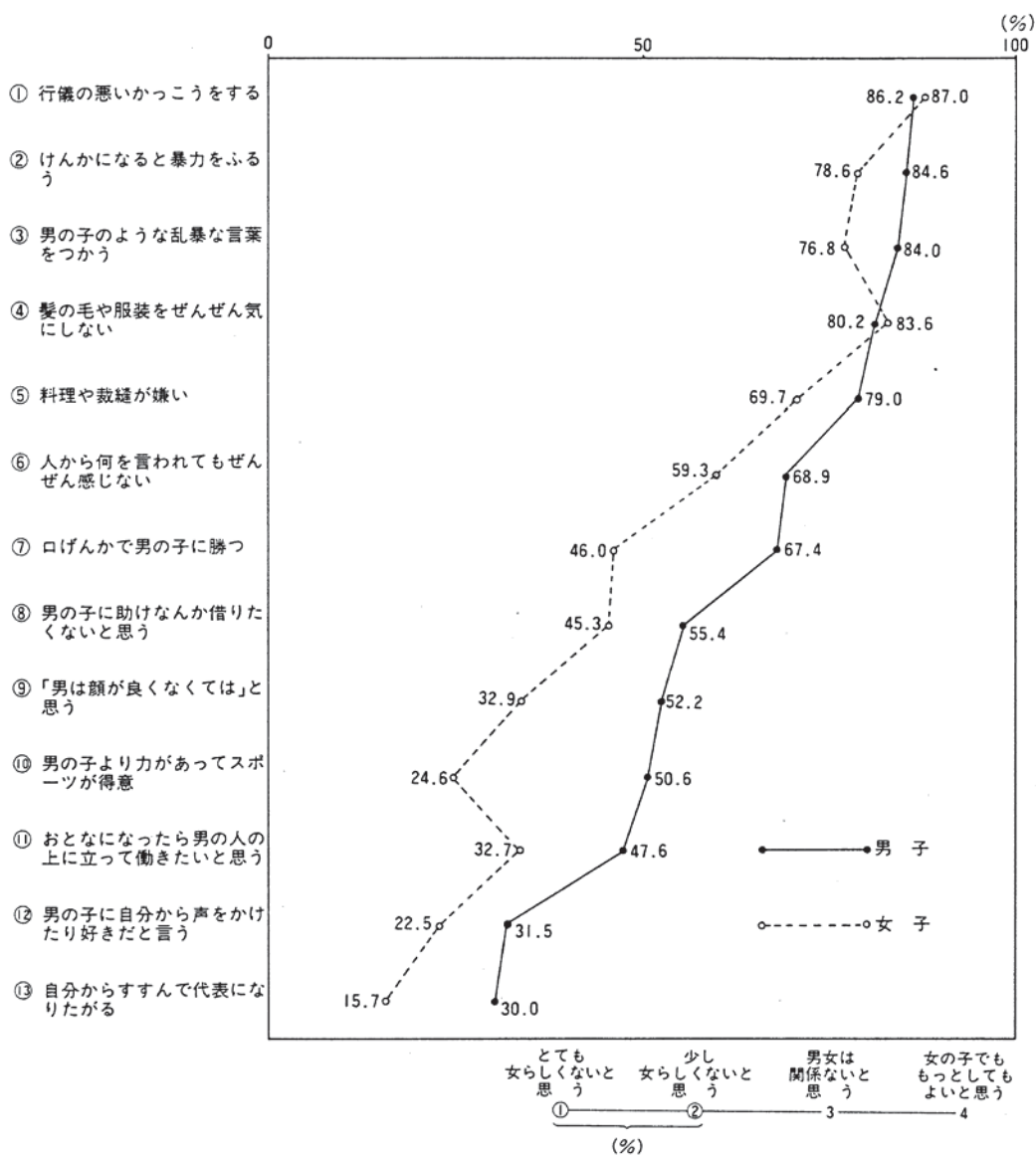
しかしそこで少し疑問に思うのは、3位にあがっている「乱暴な言葉」などは、今の中学生たちが好んでつかっている現状があるのではないかということである。それは一部の子が目立っているだけではない。図27は、図26

と同じ13項目に対し、女子は自分がしたことのある程度、男子は女子がすることを見たことがある程度を「ときどき」と「いつも」の数値だけとりだしてグラフ化したものである。これを見ると、乱暴な言葉をつかっている女子が67%に達する。行儀の悪いかっこうをする者も、なりふりを気にしない者や、料理や

裁縫  
い。  
がの  
判し  
は

(図26) 女の子らしくない行為

→ 行儀の悪いかっこうをする



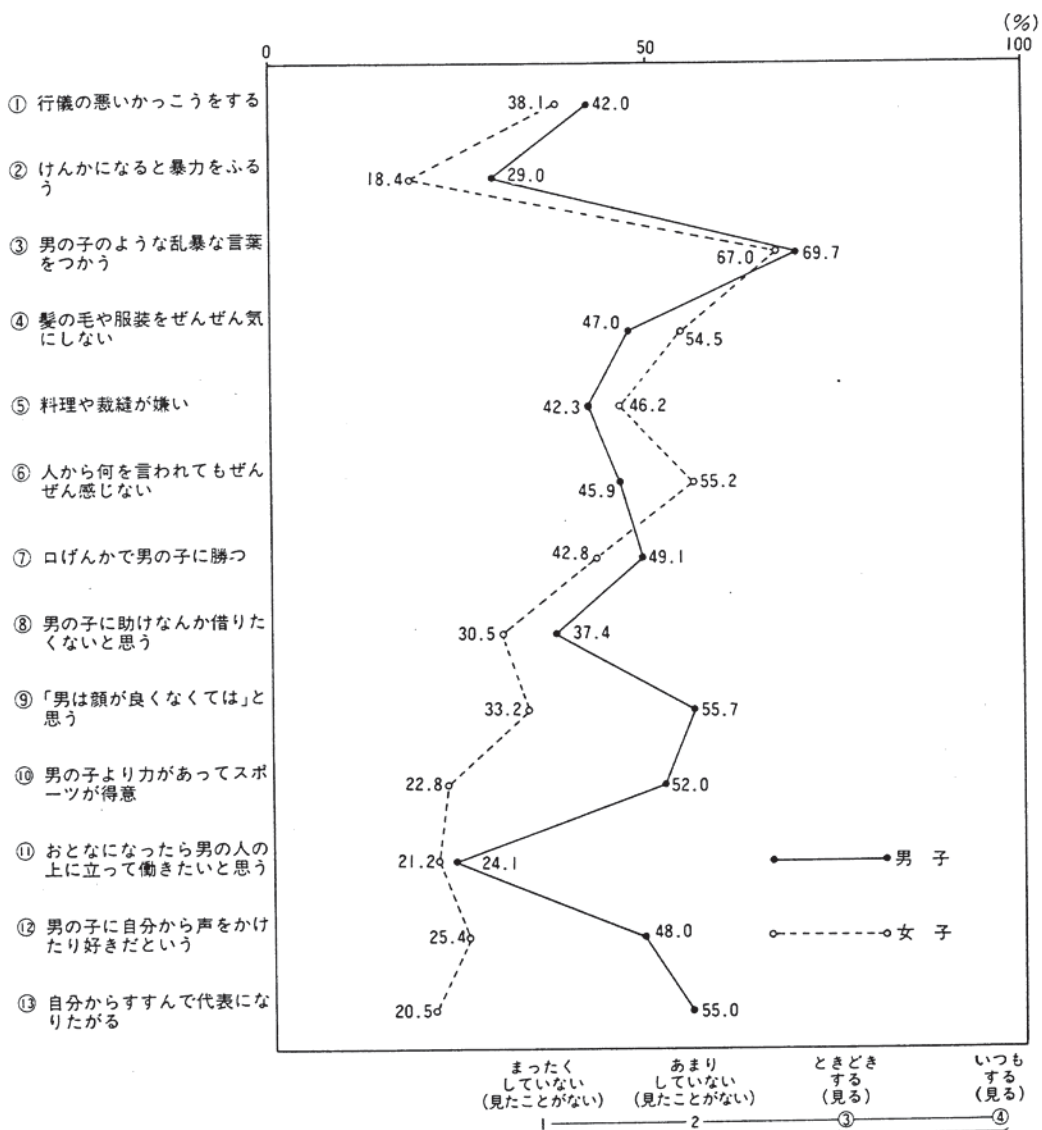
裁縫の嫌いな女子も決して少ない数値ではない。このように意識と行動の間にはかなりの差が見られる。このことをどう解釈したらよいのか、断定的なことはこのデータだけでは判断しにくい。実際の行動場面には「女らしさ」に対する反発がほの見え、意識の上では伝統的な性役割を受け入れてはいるが、無

意識のうちに外側から与えられた女性観を拒否しているものと考えられる。行動面でこのように女らしくない現実が見られるのに、なぜ意識の上で「女らしさ」にこだわるのかが、よけいに疑問に思われる。

一方「男らしさ」のほうはどうか。図28に表れているように、男子のほうも「男らしさ」

(図27) 女の子らしくない行為をしている割合

→言葉は乱れている



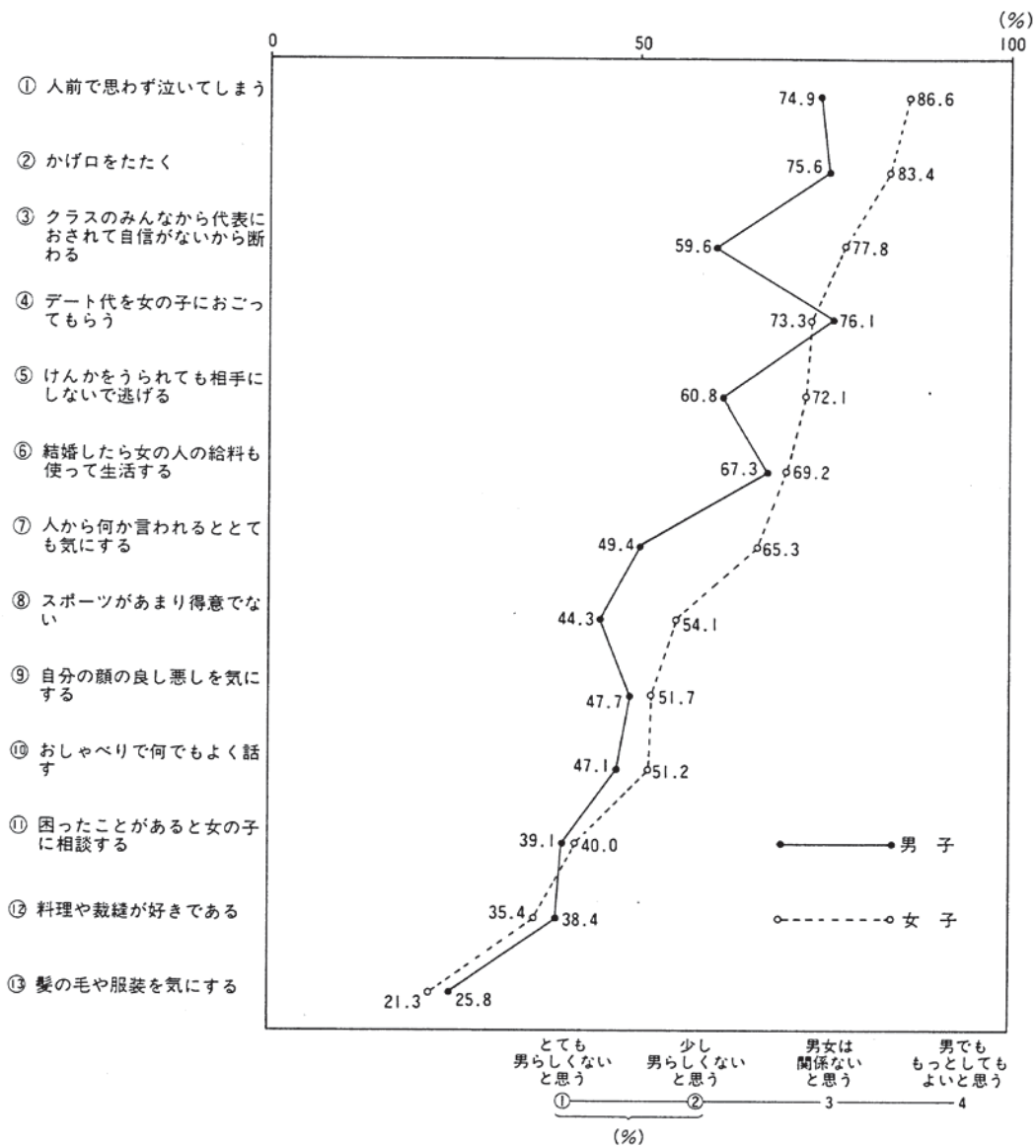
( )内男子 ( )内女子 (%)  
 質問：女子用—あなたは次のようなことをしたことがどれくらいありますか。  
 男子用—あなたは次のようなことをする女子をどれくらい見たことがありますか。

のイメージをかなり固定的に抱いている様子が読みとれる。少し昔とちがってきたと感じとれるのが⑫「料理や裁縫が好き」、⑬「髪の毛や服装を気にする」のは男らしさとは関係ないと考えている点で、いかにもかっこうにこだわるおしゃれな現代っ子らしさがうかんでくる。

男子もやはり行動面では「男らしくない」行為を行っていて、とくに図29の②など「かげ口をたたく」男子が半数近くもいて、女子の期待する男らしい男の子像とはかなりくいちがいを見せている。男子自身、男らしくないとは思っていても、かげ口をたたいてしまったり、クラスの代表におされても自信がな

(図28) 男らしくない行為

→泣くのは男の子らしくない



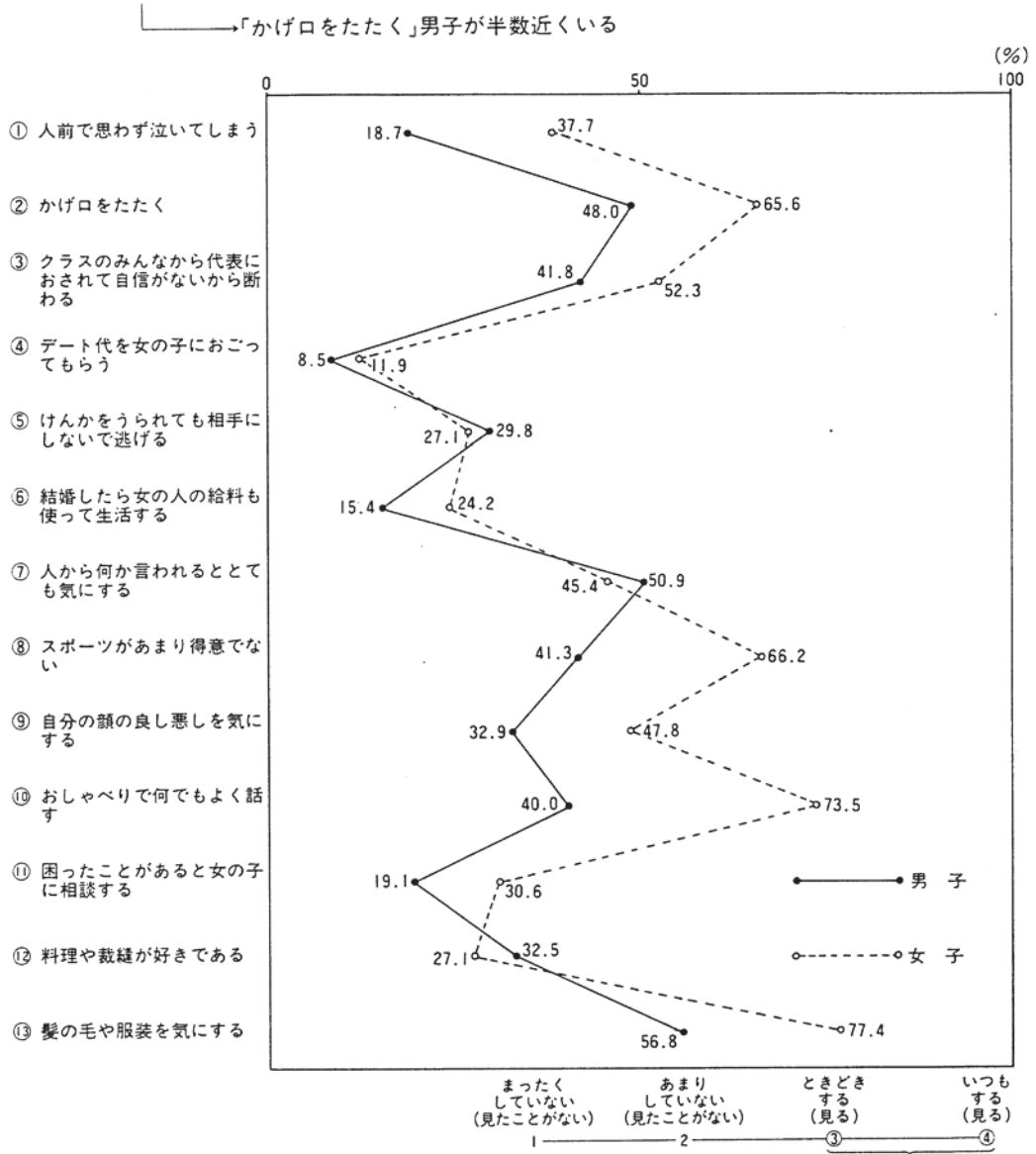


いからと断わってしまったりして、理想の自己と現実の自己との乖離が見られるのでは、自己矛盾をひきおこし、男としての自分に自信がもてなくなるのではないと思われる。

いずれにしろ、現代のように男としての生き方、女としての生き方のモデルが見いだしにくく、子どもの間にも性差がなくなってきた

ているように見える現実がある中で、中学生たちがどこから、これまで見てきたような「女らしさ」「男らしさ」のイメージ、性役割の考え方を身につけてきているのかが興味深い。

(図29) 男らしくない行為をしている割合



質問：男子用—あなたは次のようなことをしたことがどれくらいありますか。

女子用—あなたは次のようなことをする男子をどれくらい見たことがありますか。

## 〔まとめに代えて〕

——女の子を女の子らしさへとかりたてているもの——

最後に、男女の性役割について率直に意見をたずねた質問の結果を通して、今後性に関して何が問題とされるべきかを考察してみたい。

図30にあげたのは、性役割に関する雑多な内容の6つの項目である。①から③までの項目は、第4章で述べてきた結果を裏づけるものとなっている。①「女子も男子みたいな言葉をつかってよい」と考えているのは、男女とも驚くほど似通った数値で少数派であり、②「デートの費用は男子がもったほうがよい」、③「クラス代表や生徒会会長は男子がなったほうがよい」に、男女とも多くの者がそうだと答えている点について、性差にこだわらない考え方では、むしろわれわれのほうがよほど自由であるように感じられる。今の中学生たちは「女の子らしさ」という言葉の下に自ら制約を課しているようにすら思う。

今の中学生たちにそういう意識をもたせる背後には、やはり今の満ちたりて豊かな生活が生徒たちの気持ちを安定化や現状維持に志向させることが考えられる。それと同時に、もう1つ、子どもたちが好んで読むマンガや雑誌の影響も見逃さないように思う。マンガや雑誌というと、おとなたちはすぐにセックス記事に目くじらをたてがちだが、性情報を売り物にする少年・少女雑誌だけに目を向けるのではなく、子どもたちに幅広く読まれているマンガや雑誌が中学生たちに送り続けているメッセージにも、注意深く目を凝らしてみる必要がある。

とくにここでは女の子の問題をとりあげてみると、中学生たちに人気のあるマンガや雑

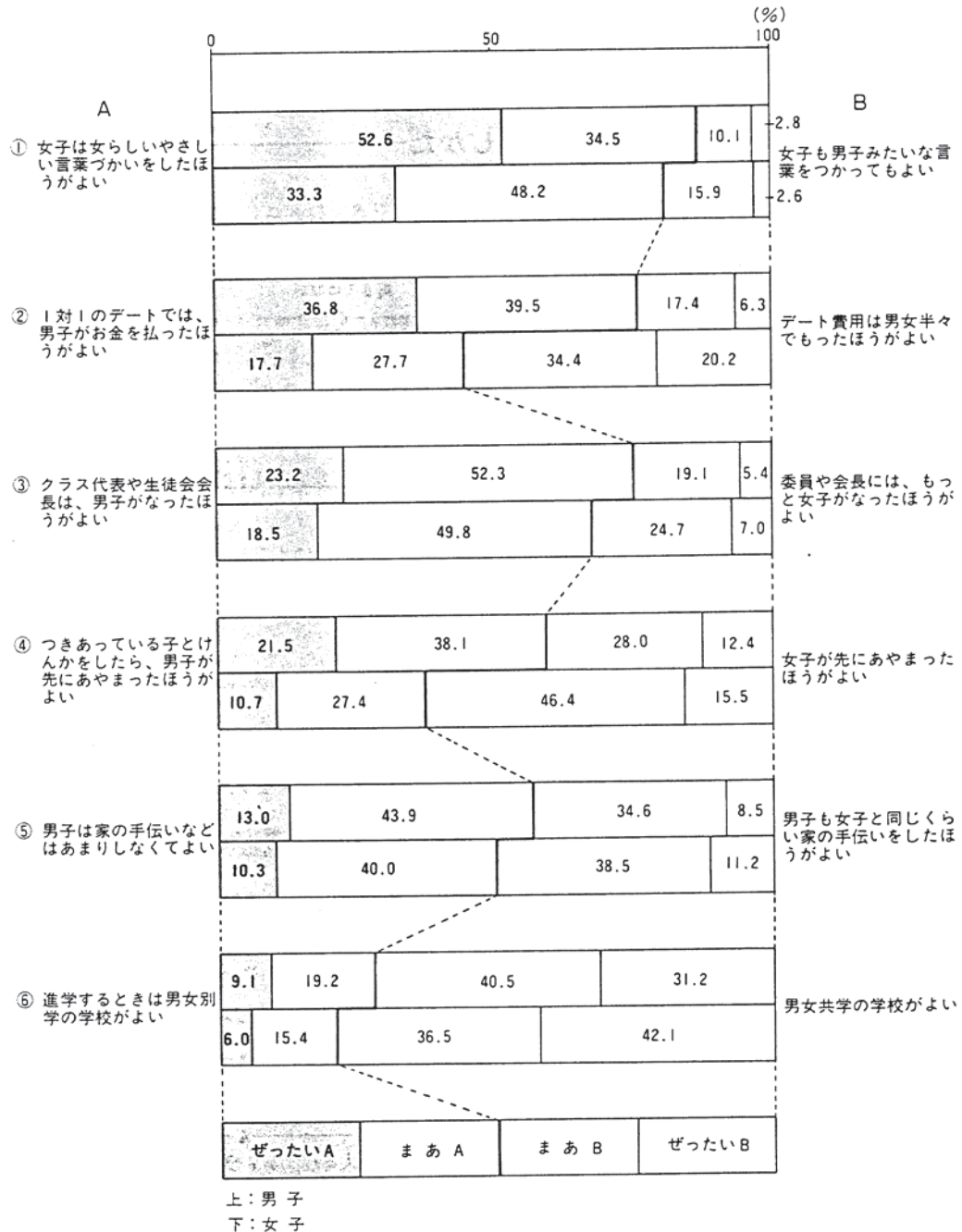
誌をのぞいてみれば、おしゃれや恋愛の記事で満載されており、女の子たちが恋愛の甘い幻想や、現実から離れた自己イメージをふくらませ続ける女の子らしい夢一杯の世界に絶えずとり囲まれている状況がうかがえる。マンガや雑誌だけでなく、テレビやレコードもそういった世界を増幅する作用を果たしていると考えられる。ただでさえ自分の中に閉じこもりがちなおとなたちが、いつもそのような世界に浸り続けることによって、子どもたちは早くから自分自身の生き方を現実のきびしさの中で問い続けることをやめ、とくに結婚という逃げ口のある女の子たちは、恋愛や結婚や家庭生活に過剰な夢とあこがれを抱くのではないかと思われる。

一方で、かなりシビアに現実社会を見ている子どもたちなので、そのように辛い思いをしながらがんばっても、男性有利にできている社会の壁にぶつかるのが関の山であるし、それよりは、楽しい恋愛や家庭生活にそなえて、女らしい家庭的な自分を目指そうとするのも無理からぬことに思われる。

残念ながら、このように女性の自立や地位の向上、社会進出を訴える声も中学生たちの耳にまで届かないように思える。少女マンガや少女雑誌で結婚後の職業生活の充実まで描いているものは稀で、仕事に生き甲斐を見いだしながらがんばっている女性の姿がたまに描かれてはいてもせいぜい結婚まで、それは結婚にたどりつくまでの人生修業としかとれない描かれ方のほうが多い。恋愛にしても、男女交際にしても、おとなはただ現象面にだけ目を向けるのではなく、子どもたちの心の底

流にひそむ恋愛観なり結婚観の全貌とその背後にあるものや、その行く末はどうなるかと いったことにもっと関心をもつべきではないだろうか。

(図30) 男女のあり方についての意見



※おことわり 本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。